堕天使の葬列　第一幕

牛を飼う男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
堕天使の葬列　第一幕

【Ｎコード】
Ｎ７０３４Ｄ

【作者名】
牛を飼う男

【あらすじ】
何者にも犯されない犯罪のない国イデア。天空に建設されたその国には『天使』といわれる種族が暮らしていた。その天使の１人であるスワンは平和で退屈な日々を素直に享受し、何の不安もなくすごしていた。しかし、知恵の実を食べたという罪で護送されているアダムという『罪人』と出会った時、その心は激しい動揺へと変化していた。アダムに興味を持ったスワンは彼が罪を犯したとされる『神聖樹』へと向かう。友達であるセガル、スワロー、ダークの３人と一緒に『神聖樹』へと到達したスワン。そこで待っていたのは

人の言語を理解できる奇妙な蛇だった。ここからスワンの運命は大きく変わっていく―。

青空の下で

白い雲１つない平野を２人の男女が歩いていた。道は公道だが砂利道で小さな石ころが多数転がっている。周りに高い木はなく、遠くの緑の景色までよく見える。道ではない草むらにはピンク色の花が咲き、その周りを黄色い蝶がヒラヒラと舞い踊っていた。

男の名前はバイン。帝国軍第四類所属。ランク５０位（最下位）。

女の名前はアナ。帝国軍第四類所属。ランク４９位。

２人合わせて通称『最下位コンビ』といわれている。

帝国とは、この一帯を支配下においている巨大国家である。その国の軍隊には第一類、第二類、第三類とあり、第四類は主に少数制をとっておりハンターなどの賞金稼ぎ達が採用されている。犯罪者からは『死帝』といわれ恐れられている実力者達である。

個々の実績によってランクづけされ、ランク２０位以上は帝国永住権が認められている。バインとアナは永住権がなく、主にレテランス（地域や国から仕事を紹介している帝国設立機関）から依頼を受け行動している。その中でも戦闘区分がもっとも依頼料が高いのだが行政区分もそこそこ料金が高く、帝軍免許を持っている者でしか仕事ができない業務独占体制をとられている。

そこでバインとアナはレテランスから行政区分『他国ドラゴニの調査訪問』を受け、向かっている最中である。

「腹減ったナ。バイン」

ボサボサのショートカットの黒髪で赤いハチマキをし、民族衣装（戦闘用）を着たアナがお腹をかかえていった。背は小さく、童顔で目が大きいのでよく子供と間違えられるのだがもう２０歳を超えている。背中には愛用のトマホーク（斧）が光った。

「もう？　まだ昼じゃないよ。それにまだ道のりは長いんだからそんなに簡単にお腹を減らすなよ」

前髪を分け、機能性の高い鎧を着こなし、腰に愛用のベータ（剣）

を持ったバインが言った。体型は剣士としては標準的、顔も平均的、ただ頭の髪はカツラである。
「ああ～腹減ったヨ。ここいらで飯にしよウ」
「だからまだ昼じゃないだってば。もう少し我慢しようよ」
「駄目ダ。もう限界だヨ。胃が収縮を始めてるヨ」
「お姉さんこんな平野で食べるよりどっかの木陰で食べようよ。こんな公道で食べてたら通行の邪魔になる」
「人なんて来ないヨ。私にはわかるネ」
「それはエスパーか？　それともフォース？　…とにかく、仮にも帝軍免許所持者がこんな所でご飯だなんてありえない」
「まったく、これだから頭光ってる奴は融通が利かないナ」
「おいおい。それは俺の中にある何かを刺激してるよ。いいのか？　俺悪いけど暴走するよ？」
いつものやりとりをしながら2人は何もない公道をトボトボと歩いていた。
「なあバイン」
「なんだいお姉さん」
「あの雲」
アナは青空に1つだけある大きな白い雲を指差した。
「あの雲にもし人が住んでいたら楽しいと思わないカ？」
「別に。あの高さから地上に落ちないか心配で夜も眠れないね」
「馬鹿だナ。あそこに住んでいる住人には翼が生えているんダ。つまり天使ダ」
「ほほ。面白いこと言うね。天使は人が創った想像上の生き物だ。実際いるわけない」
「夢のない奴だナ（…だからハゲてんダ）。きっと天使の住む国は平和で争いがなく善人ばかりダ。皆幸せに暮らしていル」
「幸せね…確かに実際そんな国があればいいよな。…ってかさっき小声でハゲって言わなかった？　ハゲてる人なんてどこにもいないけど？」

「そんな国があれば私はいっぱい子供つくって、いっぱいご飯食べさせて、いっぱい幸せにしてやるんダ」
アナは両手を大きく広げて楽しそうに笑った。
「単純だね。そんな国がそもそもあるわけが…」
「あっ、天使ダ！」
「えっ！？　どこっ！？」
「嘘ダ！　バ～カ」
「アハハ」とアナは大笑いする。バインは恥ずかしそうに顔が真っ赤になった。
「クッ…違うね。俺はお前に騙されたんじゃなく本当は変な鳥が飛んでたから…」
「あっ」
アナはポカンと口を開いた。
「天使ダ…」
「ふっ、芸がないな。嘘が二度も通用するわけがないだろう？」
「本当に天使ダ。小さい天使ダ。やっほう～」
「っておい！？　急に走るな！？」
「天使ダ！　天使ダ！」
アナは嬉しそうに空を見上げながら公道を駆けていく。
バインはアナを追いかけながら空を見上げた。
…そこには青空だけが広がっていた。

空の上で

ゴーン…ゴーン…

金色の鐘が鳴り響く中、西洋風の白い建物から白い翼をはやした1人の少女が屋上に出てきた。茶色がかったショートロングの黒髪をしており、白いローブを着ている。背は小さく、眉は弓形に丸くなっておりいかにものんびりとした性格をしていそうな少女である。

建物の外に装飾されている女神の像が少女に向かって微笑むように、少女も女神に向かって微笑んだ。

この世界は退屈だ。

私の国の名前はイデアという。

皆幸せそうな顔で道を歩いている。白い羽がユラユラ揺れる。その顔に悪意はない。

犯罪も存在しない。警察は暇そうに欠伸する警官達でいっぱいだ。経済状態も良く、適当に働いても高収入を得られる。

差別もない。貧乏人もいない。男も女も退屈そうに家で過ごしたり、外に遊びに行ったりを繰り返している。

私―スワンは学校の屋上から世界を見回した。

あらゆる屋根は白く塗られ、透明な窓からは花壇に水を与えている住人の姿が見える。

「…あ～あ」

平和な光景だ。

クルクルと体を回す。白ローブが風に揺れて太腿が見える。

世界が回りだして面白い。

白い太陽がポカポカ暖かく、1年中この天気。

「なんだか退屈～」

何か起きないだろうか。

台風とか地震とか雷とか。教科書に書いてあった天災など起きたことがない。
「何か起きないかなぁ～」
心の中で何度反復しても何も起きない。
体のバランスをわざと崩して地面に尻餅をついた。痛みがお尻から後ろの白い羽まで伝わってくる。でも頭は退屈ですっかりボサッとしており、痛いという思いすら起こらなかった。
「…どうしてこんなに平和なんだろ…」
小さく膨らんだ胸に手を置いた。体温の暖かさと胸の鼓動が耳に聞こえる。鼓動は一定で規則正しく、何の変化も起きない。
「スワン！」
顔を上げると友達のセガルが大きく手を振った。セガルは茶色の翼を持ち、髪形は黒い三つ編みにしてあり、少し内気で穏やかな少女だ。家では果汁園を経営しているおじさんの娘である。
「お弁当食べようよ！」
「…うん！」
何も起きなくても腹は減る。
私は起き上がるとセガルの元へと走った。

「このりんごおいしい！」
私はりんごにかぶりついた。セガルの他にスワローやダークも屋上へとやってきた。
スワローは茶髪の髪先にカールがかった髪型を持つ少女である。翼は白く、眉は細くてへの字になっている。顔は整っており、４人の中では一番の美人だし、お金持ちだ。ローブも私達とは比べて少し金が混ぜられており、太陽の光の中キラキラと光っている。
ダークは黒い翼を持ち、ボサボサ頭の黒髪の少女だ。男兄弟が多いせいか行動的でやんちゃな性格をしている。そのためか、顔は男の子っぽく、よく男子に間違えられる。白いローブもすぐに汚れてしまうため洗濯が大変だろうなと思う。

「でしょ？　家の庭で取れたやつなの」
セガルが自慢げに言った。内気なセガルもこれだけは自信があるらしい。
「本当、おいしいわ」
色黒の肌をもつダークがムシャムシャとりんごに噛り付いた。
「こらダーク。女の子はお行儀よくしなきゃ」
スワローが見かねて声をかけた。
「このりんご。男の子に十分プレゼントできるわ」
「…へえ～誰にあげるのよ？」
私の言葉にセガルが反応した。
「ちっ違うわよ。ほら、いつも女神の日には女の子から男の子へプレゼントするじゃない。トニーにあげようと思って…」
「え～あんな平凡な男のどこがいいの？」
スワローが意外そうな顔をした。
「義理だって。単なる幼馴染！」
私はムッとして言った。
「私なら断然ミカエル様だな～。高貴な方だし、知的だし」
スワローが頬を赤らめていった。ミカエルとは大天使長を務める私にとっては雲の上の存在である。たまに私達の町によってこられる人で確かに眩いほどの金髪に大きく白い翼をしており、女性からの人気が高い。唯一神からの祝福を受けているので永遠の美と生命を持っており、私が生まれる前から存在しているが、姿はまったく変わっていないらしい。
「あっ！　私も私も！」
負けじとセガルが手を上げた。
「え～2人ともマニアックだね」
まったく興味のない私は耳をかきながら聞いている。
「なによ。あんたは興味ないの？」
「だって付き合うことなんて不可能だもん。それに全天使のトップにいる人だよ？　どうにもならないよ」

「リアルなこと言うわね。いいのよ。あこがれなんだもの」
スワローはシャリ！　っとりんごを口に含んだ。
「…あ～あ」
「どうしたのスワン？　急にため息なんてついて？」
セガルが食べるのを止めて心配そうな顔をする。
「何か平和」
私の言葉に皆顔を見合わせた。
「当然じゃん。この国は犯罪もないし天災だってないし」
スワローが何を言い出すのやらとりんごを再びかじり始めた。
「でも平和って退屈。何か起こらないかなぁ～」
「わかる、わかるぞスワン。何か暇なんだよなぁ～。こう刺激がないっていうかさぁ～」
ダークがうんうんと頷いた。
「あんたは学校の成績がやばいでしょ。それなんとかしなさいよ」
「え～。学校の成績悪くても就職できるじゃん。勉強なんて意味あんの？」
「成績上位者は神様の下で働けるのよ。光栄な事だわ」
「俺は神様なんて興味ないね」
「うわっ、罰当たり」
スワローとダークが笑い合った。
「まあ平和って良いことなんじゃない？　変な事言うのはよしなよ」
セガルが忠告してくれた。
「…そうだよね…良い事だよね…」
私は空を見上げた。空はずっと青い空のままだった。
「でも…ねえ…」
私は空の雲を掴めないかと手を伸ばした。
当然、掴めるわけはなかった。

「行ってきま～す」

いつものように学校へと向かう。
「スワンちゃん。気をつけて学校行くのよ」
翼の大きい母親がのんびりとした口調で言う。
「わかった」
返事を返すと粘土で出来たような角のない白い家を飛び出した。
朝の道はいつものようにお年寄りか、子供か、学生しかいない。皆きちんと挨拶して登校している。
登校するときはあまり空を飛ばないようにしている。なぜなら人とぶつかることが多いからだ。だから徒歩でいつも学校に向かうのである。
「真面目だねぇ～。感心感心」
私は笑顔で手を振る小さい羽を持った女の子に微笑むと学校へと急いだ。
「やばっ！　どうせ遅刻しても怒られないだろうけどバツが悪いもんね」
近道をしようと町の商店街へと向かった。いつもここは昼は賑やかだが、お店の閉まっている朝は人がいない。この特徴を利用して学校へ向かおうという魂胆だ。
「…えっ！？」
町の商店街は予想と違って人が賑わっていた。
「えっ？　えっと？」
今日は何かの祝日だったっけ？　それとも何かのイベント日だっけ？　それとも神様がこの道を通る日だっけ？
記憶を探ってみるも何も当てはまらない。今日は閑静な朝になるはずだ。
「あれ？　スワン？」
後ろから急に声をかけられ飛び上がった。
「うわっ！？」
「何が『うわっ！？』だよ。そんなに驚くことか？」
「トニー！？　急に声かけないでよ」

トニーはいつも汚い帽子をかぶっており、白い翼をもつ少年である。私と同じくのんびりとした性格で幼馴染。昔から気が合うのでよく行動している。
「はいはい、悪かったよ。そんなことよりお前も見物に来たのか？」
「えっ…なにを？」
「何って…罪人だよ」
「ええっ！？　罪人！？」
私は驚きのあまり大声を出していた。
「馬鹿！　大声だすなよ！」
「あっ、ごめん」
「でも驚きだよな。この国に罪人が出るなんて。みんな珍しくて見物に来てるんだよ」
「…罪人が通るの？」
「ああ、エデンから護送される途中だよ」
「エデンからって…まさか禁断の実を食べたの？」
「そうなんだよ。確か罪人の名前は…アダムって言ったかな？」
禁断の実…。
エデンには様々な実をつけた木が栽培されている。その中でも禁断の実を食べることが許されるのは神様のみだ。普通の天使がこの実を食べることは許されない。
「おい、こっちこっち」
「きゃ！？」
トニーが強引に腕をつかむと鉄のはしごのある壁まで私を連れて来た。
「何よ」
「このはしごを上れば罪人の顔が見れるぜ」
「ほんと？」
「嘘なんかつくかい。俺はよくここからのぼって町を見物してるんだ」
「…平和な趣味ね」

「さあ、上ろうぜ」
トニーが親指で上を指した。
「…あんたから上りなさいよ」
「どうして？」
「私はスカートなのよ」
白いローブを手で押さえて言った。
「…あっ、そうか。じゃあ俺が後から上ればいいんだ」
それじゃ変わらないだろ。
「…あんた。それ天然？」

はしごを上り、下を見下ろすと人々が道を開けつつも興味深く遠くを見ている。まるで烏合の衆だ。
「みんな暇なのね…」
「そんなの常識だろ」
トニーは一番近くで見ようと私の腕を引っ張り、最高座席に私を座らせた。
「ここでなら罪人の顔もはっきり見えるぜ」
「……」
「なんだよ？　急に黙り込んで？」
「…なんか…怖い…」
「平気だよ。護衛兵もいるしさ。相手は1人だし、どうってことないよ。…俺もいるし」
トニーはそう言うものの何故か震えが止まらなかった。やはり緊張しているのだろう。
実際生まれてきてから罪人や犯罪者といった天使を私は見たことがない。平和ボケした笑顔しか見ていないのだ。
罪人の表情を想像する。昔、母親が読んでくれた怖い絵本の内容を思い出す。あんな顔でこっちを睨まれたら…。
「…やっぱり私学校へ行く！」

「なんだよ。臆病だな」
「臆病じゃないわよ。学校遅刻しちゃう…」
「あっ！　来たぜ！」
ザワザワと人々の声が大きくなった。大きな槍を持ち、銀色の鎧をつけた護衛兵が2人、道を歩いてくる。その後ろに銀色の鉄の鎖で首を繋がれた男がついてきている。
「きっとあの男だ」
トニーが物珍しそうに言った。
罪人の後ろには強そうな護衛兵が何人も見張っている。たかだか罪人1人にこれだけの兵隊がいるだろうか？　いったいこの罪人はどんな天使なのか？
スワンは興味を覚え、トニーと一緒に身を乗り出した。
罪人はボロボロの衣服を身にまとっていた。黒い服だ。
「…あれ？」
罪人の後ろにあるはずの白い羽がない。天使なら必ずあるはずだ。捕らえられた時に切り落とされたのだろうか？　それとも地上人なんだろうか？　地上人だとしたらどうやってこの空の上にあるイデアに来たのだろうか？　彼らは翼を持たないはず。
もうすぐ罪人が私の前を通り過ぎていく。罪人は顔を下に向けており、表情がわからない。どんな表情をしているのか見たい。
スワンはさらに身を乗り出した。

「えっ？」
罪人が止まった。ちょうど私の目の前だ。私は氷のように動くことができなかった。
罪人が顔を上げ、こちらへと視線を向けた。私と目が合った。
「……」
「……」
罪人の目は赤く血走っていた。泣いたのだろうか。表情はひどくやつれている。

「…どうして」
私はつい呟いてしまった。
なぜなら…罪人が哀れむような目でこちらを見ているからだ。
まるで私に同情するかのように、その目は優しく、悲しそうだった。

「おい…歩け」
護衛兵が罪人の鎖を引っ張った。罪人は素直に再び歩き始めた。
止まった時間がまた動き始めた。
「うわっ…怖かった…何されるのかビクッちゃったよ」
トニーは興奮して飛び上がった。

「どうして…そんな顔するの…」
この国はこんなにも平和なのに。
どうしてあの罪人は泣いていたのだろう…。

エデンと蛇（1）

蛇は本能に従って獲物を捕らえていた。蛇の鼻と目の間には赤外線を感じ取ることができるピットと言われる器官がある。この器官を使って獲物の体温を感じとることができるのだ。

その蛇にはいつも気になっていることがあった。

たまに太陽の射す天に顔を向けると感覚が強くなる。それはつまり天にはより大きな獲物がいるということだ。

蛇は毎日のように空に顔をあげた。仲間の蛇はそんな蛇のことは気にもしなかった。獲物を横取りされないので都合のいい蛇だと思われていた。

蛇は空を飛びたかった。自分に翼があれば空を自由に飛ぶことができるのに。蛇は口惜しくて仕方がなかった。

ある時、蛇は人間達が集まって何かを建てていることに気づいた。それは巨大な塔だった。どうやら人間達は天へと行こうとしているようだった。

蛇は喜んだ。人間達についていけば自分も天へと行くことができる。天へと行ければきっとこの世とは思えない絶世の獲物が食べられるはずだ。蛇は舌なめずりをした。

蛇はスルスルと塔へと近づいていく。途中1人の男に出会った。都合がいいので蛇は男へと近づいていった。

男は蛇を見ても怖がらなかった。蛇という生き物に対して恐れを知らないのだ。

蛇は「シュ」と舌を出した。

＊＊＊

スワンは授業に身が入らなかった。今日あった罪人のことが気になっていたからだ。

「…こら」
ポンッと先生から教科書で頭をはたかれた。
「ちゃんと授業には集中しなさい」
後ろからクスクスという笑い声が聞こえてくる。
それでも私の頭から消えることはなかった。

「なに？　どうしたの？」
休み時間となり、スワンの様子がおかしことに気づいたセガルが話しかけてきた。セガルとは同じクラスである。
「え？　なにが？」
話しかけられたことにも気づかず、変な返事をしてしまった。
「なにって…授業中にボウッとするなんて珍しいから…」
「うん…あのね」
私は今日あった出来事を話し始めた。
「えっ！？　罪人に会ったの！？」
「ちょっと、声が大きい…」
「どんな人だったの？　やっぱり怪物みたいな奴だった？」
「はは、私もそう思ったんだけど…以外に普通の人だった…ただ…」
「ただ？」
「翼が…なかったの」
セガルは驚きで声が止まった。
「翼がない…どういうこと…」
「わからない。どうしてだろ？」
「神のご加護がある者には天へと昇るために翼が必要なはずよ。それだと飛べないわ。いったいどうやって神の寵愛を受けるのかな？」
セガルは考え込んだ。
「…いったいあの人は…何者なの？」
スワンもセガルと同じく腕を組んだ。
「へえ～噂で聞いていたけど罪人てそんななんだ。絵本の怪物とは

違うんだな」
ダークがりんごの実を咥えたまま、翼を上下に動かした。
「やだわ。この平和な国にそんな野蛮な天使がいるなんて」
スワローは首を振った。
「それがさ。おかしいのよ。その天使、翼がないのよ」
セガルが話題を振る。
「ええっ！！」
スワローがびっくりしてりんごを落とした。
「それってどうやって飛ぶの？」
ダークは特に驚かなかった。
セガルはダークの反応は予想していたので、スワローの反応を見るだけで満足だった。
「不思議よね…翼のない天使。やっぱりエデンと何か関係があるのかしらね。それとも地上人？　…はないわね。翼がそもそもないもの」
スワローは落としたりんごを再び手に取った。もう食べる気がしないので学校の窓から土に向かって投げ捨てた。
「でもどうしてスワンが罪人のこと知ってるのさ」
ダークは興味深そうにスワンを覗き込んだ。
「トニーと見に行ったの…商店街に罪人が通るって…」
「あっ、それで今日遅刻しかけてたんだ。何かトニーとしたの？」
「しないわよ！」
「冗談だよ。そんなに怒るなよ」
ダークはケラケラと笑った。
「でも…やっぱり気になるの。あの罪人のことが」
スワンは屋上の空を見上げた。
銀色の鉄の鎖で首を繋がれた男。体も私達と何も変わらなかった。ただ違うのは翼がないこと。
それに…あの悲しそうな表情。
いったいあの人は何をしたのだろう？

この平和な国で、どうしてあんなに悲しそうなのだろう？
あの人を思い出すと不安になる。自分の胸が何かにつつかれたように痛く、苦しい。この気持ちは何なのだろう。
「ねえ？　泣いたことってある？」
私は唐突に3人に尋ねた。
「泣いたこと？　あるわよ。演劇を見て」
スワローが何を急にという顔をして言った。
「私もあるよ。記憶喪失になった恋人のために尽くす女の演劇」
セガルも正直に言った。内気なわりにはそういうのが好きなんだなと思った。
「ああそれなら知ってる。戦争で別れる2人。恋人を待つ女」
「だけど戦争が終わっても恋人は帰ってこない」
「我慢ができず恋人がいるであろう場所へと向かう女」
「するとそこには事故で記憶を失った恋人がいた」
「だけどその恋人には献身的に介護をしてくれている婚約者がいた」
「もつれあう2人の女。1人の男をめぐって複雑な恋愛模様が繰り広げられる」
「婚約者の気持ちを知った女は身を引こうと涙を流しながらその場を去ろうとする」
「しかし恋人の記憶が蘇りそして2人は…」
「キャー！！」
「イヤー！！」
セガルとスワローは勝手に2人でもりあがりバシバシ2人で体を叩き合っている。よっぽど恥ずかしい…もしくはくさいらしい。
「俺もあるぜ」
ダークは親指を自分に向かってたてた。
「男との決闘に負けたときだ。ジャンケンで負けてあの果物を取られた時のくやしさったらもう…」
「そんな低俗な涙じゃないわ」
スワンはズバッと切った。

「なによ。スワンのくせに生意気なこと言うわね」
スワローが腰に手を当てて言った。
「違うの。そんなんじゃなくてもっとこう…言葉では言い表せないような…」
私はもどかしそうに両手を動かす。
「…スワンそんなに気になるのか？」
「うん…」
「じゃあさ。そのエデンって所に休日行ってみようよ」
ダークがとんでもない提案を出してきた。3人とも唖然とダークを見つめた。
「…なんだよ？」
「あなた何考えてるの？」
「何って、エデンに行こうって言ってんだよ」
「はあ～…あなたね。エデンは絶対禁止区域よ。神と熾天使なんかの位のある天使じゃないと入れないの」
「マジで？　なんだ～いつか行こうって思ってたのに」
「…あっあんたねぇ」
さすがのスワローもダークの無知ぶりに自分の頭を押さえた。
「いいかも」
「へっ？」
スワンの一言にスワローは目を見開いた。
「行ってみようよ。何があるのか知りたい」
「そうね…私も一度見てみたいわ」
セガルもスワンに賛同した。
「あっあなた達…神様の罰が当たるわよ」
「心配しすぎだって。なっ」
ダークはスワローにビッと親指を立てた。スワローは信じられないといった顔で3人を見回した。
＊＊＊

「ひゃほう〜！！」
ダークは楽しそうに翼を広げ、３人の間を旋回した。
空には地上から蒸発した水が雲となって浮かんでいた。ダークはその雲を突き抜けながら元気よく飛び回る。
「やっぱいいわ〜。大体天使なんだからいつまでも建物の中にいたら羽が腐っちゃうっての」
普段私達天使は翼を使うことが少ない。道も普通に歩くし、家も学校も会社も建物の中だ。翼を使うのは長距離の場所に行ったり、目的地が飛行しなくては行けなかったり、神の元へと向かう時だ。
「ああ〜すっごい嫌な予感がするわぁ〜」
さっきからスワローは頭を抱えている。
「大丈夫だって」
「…あんたはなんでそんなに気楽なのよ」
ダークの気楽さにスワローは嫌味の１つでも言いたくなった。
「見えてきた」
セガルが叫んだ。
…そこには青、赤、茶色―――色のついた実のなる森があった。美しい水色の湖があり、その真ん中にポツンと一本の木が見える。
「…あれがエデン」
教科書の写真のとおりだ。七色の森といわれるだけあってその果実達は美しかった。スワンはゴクリと唾を飲み込んだ。
「もうこの先を飛んだら捕まる。いったん下に降りましょ」
セガルが地面へと降下し始めた。３人はそれに続いた。

エデンの樹には一匹の蛇がいた。蛇は空を見上げていて、４人の天使がエデンに向かってきていることを知った。
「…おやおや珍しい…可愛らしい天使達だ」
蛇は舌を「シュ」と出した。

エデンと蛇（2）

蛇は人間に近づいたがどう自分があの塔へ行きたがっているか伝えるか考えていた。なぜなら、蛇は人間の言葉を知らなかった。とりあえず体で塔へ行きたがっていることを示そうとクネクネ回った。

男は蛇の様子をしばらく見ていたがやがて何か閃いたように言った。

「なんだ私と一緒に行きたいのか？」

男は冗談半分だったが、蛇は塔へと舌をだした。実は蛇は人間の言葉などわかっていなかった。ただ必死で塔へ行きたいとアピールしているだけだった。

「そうかそうか。それでは来なさい」

男は都合よく蛇の動きを思い通りに解釈した。

男は蛇を掴むと肩に乗せた。

蛇は男に自分の意思が伝わったので喜んで舌を出した。

男と蛇の１人と１匹は塔へと歩き始めた。

＊＊＊

ダークとスワローとセガルとスワンの４人はエデンの傍まで降り立った。樹でできた囲いの傍には門番の天使が立っている。

「うわっ…強そう…」

ダークが指をかんだ。

門番は薄い布地から筋肉質な体が見える。

「あんた…もしかして門番を倒す気じゃないでしょうね？」

「そうだよ？」

「…馬鹿だわ…昔から馬鹿だと思ったけど本当に馬鹿」

「なんだよ～、駄目なのかよ」

ダークとスワローが言い合いを始めた。

「やっぱり無理よ。あんな門番勝てっこないし、もし捕まったら天罰が下るわ」
「なんだよ大丈夫だよ」
「はいはい。親子喧嘩はやめてね」
セガルが2人の言い合いを止めようと冗談を言った。ダークは肌が黒っぽく体が小さい。スワローは白っぽい肌に背が高く老け顔なので、2人を見ていると確かに親子に見える。
「親子じゃない！！」
ついスワローが大声で言ってしまった。「はっ」としてスワローは手で口を押さえた。
「馬鹿…遅いっつーの」
ダークが「あ～あ」と声を漏らした。
「誰だ！！」
門番が声に気づいて4人のほうへと身構えた。
「1抜けた」
ダークが素早くその場を離れた。
「えっ！？　ちょっと！？」
「まっ、待ってよ」
スワローとセガルが慌ててダークを追いかけた。
「こら！！　待たんか！！」
門番が気配に気づいて侵入者を追いかけていった。

…後に残されたのは逃げ遅れたスワン1人だけだった。
「…どうしよ」
つい反射的に傍の茂みに隠れてしまった。運よく見張りには気づかれなかったが1人になってしまった。
「やっぱり私も離れたほうが…」
ガサッ

「ビクッ」とスワンは体を震わせた。後ろの草むらで何かが動いた。
「…何？」
恐る恐る後ろを振り向いた。そこには誰もいなかった。
「誰も…いない…」
「ここですよ。ここ」
「えっ？」
声がした。草むらがサワサワと風に揺らいでるだけで何も見えない。暖かい日差しと鳥の鳴き声が周りから聞こえてくる。
「しょうがないですね…」
声の主は草むらから顔を出した。
「私ですよ」
ひょこっと出てきたのは蛇だった。スワンは特段驚くこともなく蛇を見下げた。
「あなたがしゃべってたの？」
「そうです。私があなたに話しかけました」
「ここで何をしてるの？」
「それはこっちのセリフですよ。天使にとってここは禁止区域でしょう？」
「まっまあそうね…」
スワンは痛いところをつかれたと思った。
スワンは腰をおろすと蛇と対面した。蛇は緑色の鱗に黒い瞳で「シュ」と何度も舌を出している。
「まあ私もあなた達と似たようなものですが…それにしてもあとの3人は不幸でしたね」
「あっ！　どうしよ…」
「ほおっておいても大丈夫でしょう。あなた達天使は神の加護がありますから。例え捕まったとしても叱責だけで終わりますよ。…私達と違って…」
「えっなに？」

「いえ…なんでもありませんよ。そんなことよりエデンの中に入りたいと思いませんか？」
「えっ？　入れるの？」
「ええ、抜け道がありますから。どうですかエデンに入るために来たのでしょう？」
蛇は悠長なしゃべりでスワンを誘った。
スワンは少し迷ったが、あの罪人のことを思い出した。あの悲しそうな瞳の理由を知りたい。そのためにここに来たんだ。
「わかった。どこから入れるの？」
蛇は「シュ」と舌を出した。表情は読めないがどこか笑っているように見えた。
「それでは行きましょう。ついて来てください」
蛇はスルスルと草むらを移動していく。スワンはその後をついてく。
「痛たた…」
スワンの髪が木の枝に引っかかった。
「気をつけてくださいよ」
「小さいのは便利ね」
「それはありがとうございます」
蛇はスワンの嫌味を無視してさっさと先へと急ぐ。やがて鉄の金網が姿を現した。
「なに…この金網？」
「侵入者を防ぐためですよ。古典的ですがその金網に触れるだけでさっきの門番が飛んでくる仕組みになってます」
「へえ～」
スワンは金網をまじまじと眺めた。金網の隙間はスワンの手を握り締めたぐらいしかないのでとうてい通り抜けられない。金網を掴んで上ろうとすればさっきの門番に気づかれてしまう。
「じゃあ飛べばいいんだ」
スワンは白い羽を広げようとした時、

「駄目です！」
蛇が小さく大声をあげた。
「えっ？」
「この金網から上は透明な『神糸』で出来ています。飛んで中に入ろうとすれば粘着し、体が動かなくなります」
「そうなの？」
「木の実を食べにくる鳥を防ぐための処置ですよ。あなた達天使に対してもね。ここは禁止区域ですよ？　普通に考えれば何か罠があるに違いないと気づくでしょう？」
蛇の嫌味にスワンは少しムカッとした。
「じゃあどうして地面は金網なのよ」
「それはミミズなど土を豊かにしてくれる微生物は進入をゆるされているからですよ。あくまで『禁断の果実』だけは例外で、あらゆる生き物は食べてはならないですから」
「果実を食べる虫だっているわ」
「それはこの金網の向こうの土で排除されます。彼らにとって有害な物質がありますから。それに『禁断の果実』の周りには霧と湖がありますから泳げないものはそこで溺れ死にます。…これは教科書で習う内容だと思いますが？」
スワンは逆効果だったと後悔した。自分の無知さをさらけだしてしまったからだ。
「…わかった。ごめんなさい。それでどうやってこの金網を抜けるの？」
スワンは負けを認めた。
「…無理ですね」
蛇はため息をついた。
「えっ？　なにが？」
「この金網の向こうにある『禁断の果実』のなる神聖樹に到達すること…がです」
「どうして？」

「…アダムが開けた穴が塞がれています。対応が早い」
蛇は首を振った。
「アダム…」
スワンは蛇がアダムのことを知っていたので驚いた。
「きますね」
「えっ、何が？」
「さっきの門番ですよ。どうやらお仲間の天使様が捕まって、あなたのことを白状したみたいですね」
「えっ！？　どっどうするの！？」
「私は逃げますよ。見つかったらただではすみませんから。あなたは捕まっても大丈夫です」
蛇は金網をスルスルと抜けると奥の森へと向かっていく。
「ちょ、ちょっと待ってよ！」
「大丈夫ですよ。あっ、私のことはくれぐれも内密に…」
「違う！」
スワンはつい興奮して金網をつかんだ。
「…あの人のことを…アダムのことを教えて！！」
蛇はピクリと動きを止めた。しばらく蛇は考えているようだ。スワンにとってその時間はとてつもなく長く感じていた。
「なぜ？　アダムのことを知りたいと？」
「あの人の…あの人の涙の理由を知りたいの！！」
咄嗟に出た言葉だった。蛇は何も言わず、黙って聞いていた。
「…そうですね。あなたがこの禁止区域に入れる立場の天使様になれたのであれば…」
蛇は振り向かなかった。そのまま再び森の奥へと進み始めた。
「…真実を…教えてさしあげますよ…」

蛇はボソリと呟くように言った。だが、スワンにははっきりと聞こえた。

「絶対よ！！　私は必ずあなたの所まで行くから！！」

スワンは叫んだ。蛇は何も答えず、森の奥へと入っていった。

―その後、私達４人はこっぴどく叱責され。家へとしばらく謹慎処分を受けた。

公園で

公園では人々が楽しそうに歩いている。子供も大人も老人も。あの白い建物の中に入っていく人もみんな笑顔だ。
公園の木々には青や緑の玉が実としてなっている。その玉から良い香りがしてくる。
「…はあ」
スワンは公園のベンチでため息をついた。背中の白い羽がパタパタと動いている。
「悩んでるねぇ」
急に声をかけられた。振り向くとダークがニヤニヤ笑いながら立っている。
「羽が動きまっくってる。えい」
「うわっ！」
ダークがスワンの羽の動きを止めようと掴んだ。スワンの顔が真っ赤になった。
「えっ？　どうだ？　気持ちいいか？」
「はぅ…やだぁ…」
バシッ！
「痛で！　なんだよ！」
「こらっ！　ダーク！　やめさないよ！」
ダークの後ろからスワローの声がした。どうやら2人で公園に来ていたようだ。
スワンは深呼吸すると興奮する気持ちを落ち着かせた。
「あれ？　みんな来てたの？」
セガルも公園に来ていたようだ。目には黒縁の眼鏡をしている。
「あれ？　どうしたの？　その眼鏡？」
「ちょっと…視力の方がね…」
ダークの質問にセガルは無意識に眼鏡を動かした。まだ慣れてい

ないのだろう。セガルの茶色い羽が微妙に動いている。
「みんな謹慎処分うけて暇なんだねぇ」
そう。私たちは許可なくエデンへ近づいたことにより、2週間の謹慎処分を受けていた。
「…ってか。あんた本当に反省してるの？」
「してるしてる。してますよ」
「嘘っぽい」
「そういうスワローだって謹慎処分受けてんじゃん」
「うっ…言わないでよ…母さんにこっぴどくしかられたんだからぁ～」
スワローは本気で辛そうだ。そんなスワローをダークがからかい、2人のいつもの喧嘩が始まった。
「ちょっと、スワローもダークもやめてよ。私達一応家で待機してなきゃならないんだから」
セガルが眼鏡をズレを気にしながら2人の喧嘩をとめようとする。
「…はあ～」
スワンのため息に3人は動きを止めた。またスワンの羽がパタパタと動いている。
「なに？　腹でも痛いのか？」
ダークが腹をポンと叩いた。
「違うわよ。恋よ。恋わずらい」
スワローがさっとダークに耳打ちした。
「…どっちも違うような気がするけど。どうしたの？」
セガルがスワンに聞いてきた。
「ねえ。エデンに入るにはどうしたらいいの？」
「……」
「……」
「……」
「「「はっ！？」」」

「なに？　私なんかすごいこと言った？」
「あんたね…ダークじゃないんだから学習しなさいよ」
スワローが呆れるように言った。
「それはどういう意味だ？」
「そのまんまの意味よ」
「まっ、まあまあ。スワン。またエデンに無理矢理入り込むってこと」
スワローとダークを牽制しながらセガルが聞いてきた。
「ううん」
スワンは首を振った。髪がさらりと揺れる。
「別の方法でエデンに入ることができないかなって。誰にも叱られない方法」
「なんだ…」
セガルがほっと胸をなでおろした。眼鏡がまた微妙にズレた。茶色い羽も微妙に動いた。
「でも…エデンに入るのって座天使ぐらいの階級じゃないと無理なんじゃない？」
スワローが腰に手を当てて言った。
「なに座天使って？」
サッとダークが手をあげた。
「…あんた…どうしてそんなことも知らないの？」
「あっ…あの～」
「なに？　スワン？」
「私も知らない…」
「…嘘でしょう」
スワローは仕方なく地面に図を描き始めた。３人は興味深そうにその様子を見つめている。
「いい…天使には９つの階級があって―」

■下級天使
天使（エンジェルズ）
大天使（アークエンジェルズ）
権天使（プリンシパリティーズ）

■中級天使
能天使（パワーズ）
力天使（ヴァーチュズ）
主天使（ドミニオンズ）

■上級天使
座天使（スローンズ）
智天使（ケルビム）
熾天使（セラフィム）

「―こういうふうなピラミッド型になってるの」
「はい」
「はいダークちゃん」
スワローはビッとダークを指差した。
「どうして天使のほうが範囲が広いんですか？」
ダークはピラミッドの最下層を指差した。
「それはね。天使は一番階級が低くって、人数が多いからピラミッドの中で範囲が広いの。ちなみに熾天使は頂点にいる天使だから人数も少ないの」
スワローは髪をかきあげると自慢げに言った。茶髪の髪がキラキラと輝いた。羽もピンと伸びている。
「…はい」
「はいスワンさん」
「私達の階級はどこになるの？」
「当然…一番下。天使よ」

スワンはガクリと首をうな垂れた。
「道は遠いね」
セガルは励ますようにスワンの肩をポンと叩いた。
「これは豆知識なんだけど。私達の天使の性別は女が一番多くて次に中性的存在(ナチュラル)が多いの。男は全体数で見てみると少ないのね」
「それで女神の日なんてものがあるのね」
セガルがポンと手を叩いた。
「私達天使は神の模倣者である『コピーイング』、つまり地上人ね、と似ていると言われているわ」
「じゃあ…エデンに行くには上級天使にならないと駄目なんだ」
スワンはがっかりしたまま言った。
「まあそうね。はっきり言って無理だわ」
スワローははっきりと言った。それを見てセガルが慌てて「シー」っとスワローにジェスチャーした。スワンの体から黒いオーラが醸しだされている。
「あっ…ああ…ごめんごめん。でも方法が1つあるわよ」
「えっ!?　なに!?」
スワンが即効で飛びついた。スワローはそんなスワンの行動にちょっと引いた。
「ミカエル様に聞いてみるの。きっと良い知恵を授けてくれるわ」
スワローは手をあわせ握ると太陽に向かって羽を広げた。
「…単に会いたいだけだろ」
ダークが呟くようにボソッと言った。
「…ミカエル様に…」
スワンは空を見上げると雲の奥の奥を眺めた。

ミカエルの神殿で

ドラゴニ国の城の上に1人の男がいた。黒い服装が風になびく。長身でスポーツ刈りのように髪は短く、細長い体格をしている。

「…いい天気や。気持ちがええで」

その男の口から長い舌がこぼれ落ちた。トカゲのような長い舌がゆらゆらと揺れる。

「そうおもわんか？」

男は隣にいる翼のはえた男に言った。その男は黒いローブを全身にかぶり、大きな口から覗かせる鋭い牙でニヤリと笑った。

「そうだね。気持ちの良い天気だ」

ローブの男は表情をローブで隠し、口だけで答えた。

「大体は完成やな。魔術を通しやすい石材を使ってこの国全体に魔方陣を描き、国民の血を吸った天使達を適切な場所に配置する。あとはあんさんの主人がエネルギーをこめれば完璧や。…ところで、ここまでして何やる気なん？」

「…それは君が知る必要はないよ」

「冷たいなぁ。まあええわ。ところで請求書なんやけれども…」

トカゲのような男が気配を感じ後ろを振り向くとそこには少年が立っていた。黒いローブの男はさっと後ろへと下がる。

キラキラ輝く黒髪に大きな瞳が静かに瞬く。端正な顔が国全体を覆った橋のような魔方陣を見つめている。

「良い出来だね」

「そりゃそうやで。人件費はかけたさかいな。…ときに『女神の血』を手に入れたというのはほんとなん？　ダークドラゴン…いや、S級犯罪者円術士『π』といったほうがいいか」

「本当さ」

「どうや。血は体に馴染むか？」

「うん。問題ない」

「そうか。ちなみにあの帝国軍第四類…通称『死帝』がここに向かってきてるみたいなんやけども。あいつらは少数精鋭やさかい人数は少ないけれども、帝国軍第一類が動き始めたらやっかいやで」
「平気だよ。この城を中心とした結界でもう誰も入ることはできない。それに死帝なんて所詮花に養分を運ぶだけの『根』。―この女神の力を持ってすれば恐れはない」
πは可愛らしく微笑むと大きく手を広げた。両目が徐々に血のように赤く染まっていき、青い瞳が変色していく。右目の奥には何かの紋様が黄色く輝く。
「おっ、おいおい。ここでやる気か？」
「…試しに使ってみるだけさ。あと…あの国を逃がさないように捕まえなきゃならない」
「あの国？」
「物語の国さ。しょせん紙の中だけの国。―ただの紙屑さ」
πは残酷な表情で微笑むと魔術を発動させた。
「あっ！　レベッカーの奴忘れとった…。まっいいか」
トカゲのような男は腕からはえた鋭い3本の鍵爪で頭を掻いた。

「本当にいいの？」
スワンがモジモジしながらスワローに聞く。
「いいのいいの。どうせ謹慎くらって暇だし」
スワローは「やれやれ」と両手を広げながら空をパタパタと飛んでいる。
今私達4人は『神殿』に向かっている途中だ。神殿には熾天使であるミカエル様が降臨されている。
神殿への道は空を飛んでいかなければならない。青の空が赤茶色に染まり、雲が薄く消えていく。風が暖かくて心地よく、翼から神の波動を感じやすい。
「さすが神に一番近い建物といわれるだけはあるね」

セガルが明るい表情で髪を掻き分ける。
「う～ん。気持ちいい。ここで昼寝してもいいな」
「あんたは本当にしそうで怖いわ」
ダークもピンと翼を伸ばして気持ちよさそうに飛行している。
雲が完全になくなり、暁の空に染まり、小さい玉のような水晶が色とりどりに浮遊してきた時、目的地である神殿が見えてきた。
神殿は真っ白に染まり、窓がまったくなく、丸く鉛筆のような形をした塔が何本も建築されていた。壁にはいくつもの神像が造られており、神々しい姿で世界に向かって手を広げている。
私達は怪しまれないように正門へと向かうと、力強そうな男の番兵に声をかけた。
「あの～…」
「なにかな？　神の使者天使よ」
番兵は見かけによらず優しげな口調で答えてくれた。
「ミカエル様にお会いしたくてやってきたのですが…」
「ほう？　何用で？」
「知恵を授かりたくて…」
「そうか。それなら案内しよう。迷える天使よ」
番兵は頷くと建物の中に入っていく。
「…なんか…あっさり入れたな」
「…ほんと…毎日来ようか」
ダークとスワローがヒソヒソと話し合っている内に番兵は建物の中に入っていく。スワン達は慌ててその後ろを追いかけていった。
建物の中は七色のガラスで出来ており、光を反射しながら内部を明るく照らしている。あまりの美しさに呆然と口を開けてしまった。宙を浮いている透き通った水玉が頬をつるりとすり抜けていく。
「すげー」
あのダークも驚いている。セガルとスワローも同じ表情で辺りをキョロキョロと見回している。
廊下を一歩歩くと響き渡るような美しい旋律の音が奏でられる。

心地いいうえに気持ちが高揚してくる。背中の翼が嬉しそうに小躍りする。
「ここは初めてか？　小さな天使達よ」
「は、はい」
「そうか。ここはとても心地よいだろう？」
「おう！」
「こら、ダーク」
スワローが慌ててダークの不躾を注意する。
「はは。よい。さあこっちだ」
番兵は少し微笑むと、前へと進み出した。
しばらく歩くと大きな扉が見えてきた。番兵が扉を開けるとその中はとても広く、書籍がたくさんつまった本棚があった。本棚は何十、何百とあり奥が見えない。2階、3階、4階へと続く螺旋階段があるのだが、天井にすら本棚が置いてあった。恐らく重力が逆転しているのだろう。
「うわっ…」
ダークが嫌な顔をした。どうやらダークにとっては絶対に行かない禁止区域のようだ。
「すごい本ですね」
セガルが番兵に感心したように話しかけた。
「ああ。ここにはあらゆる知識がつまっておる。この世界のすべての知識と言ってもいいだろう。ミカエル様は神の子。何もかも知っておられるよ」
番兵も自慢気に答えた。
「それではミカエル様をお呼びしよう。ここで待たれよ」
番兵は出口へと向かうと扉を閉めた。
「…いつもどんな本を読んでおられるのかな？」
スワンは本棚をグルリと見回した。
『遺伝子工学』
『マザーグースの唄』

『機械工学』
『心の源泉』
（なんだか難しそう…）
スワンは目がクラクラしそうになった。
「なあ！」
書籍にまったく興味のないダークがみんなに呼びかけた。
「なによ」
「これ誰だろうな？」
ダークはパタパタと飛行しながらある肖像画を指差した。
そこには穏やかそうな初老の老人が描かれていた。髪は前髪がハゲかかっており白髪。眉は弓形で目もギラギラとしておらず柔和。茶色いローブを着ており、手には一本の杖を持っている。
「…なんだか優しそうな人」
一目で気に入ってしまった。
「ほんと…もしかして神様かな？」
「そんなわけないでしょ」
セガルの言葉にスワローがすぐ否定した。
「どうして？」
「…まあ根拠はないけど」
ガタッ
急に扉が開いた。私達４人はビクリと体を震わす。
「やあ。お待たせ。君達かい？　僕に相談したいという天使は？」
そこには大きな白い翼に眩くほどの金髪をした大天使長ミカエルが立っていた。その鐘が鳴るような声についうっとりとしてしまう。
「そっ…そうです」
スワローは完全に緊張してしまっている。無理もない。憧れの人が目の前にいるのだから。
「はは、僕に答えられる内容ならいいけどね」
「あのっ。私エデンへ行きたいのです」
スワンは思い切って言った。

「ほう…エデンへ？　何のためかな？」
ミカエルは微笑を崩さないが、探るような口ぶりで聞いてきた。
「そっ…それは…」
『私のことはくれぐれも内密に』
スワンは蛇の言葉を思い出した。
「エデンへ行き知恵の実を食べたいんだ！」
ダークがはしゃいで言った。
「はは、それは駄目だよ天使よ。あの実は神への奉納。我々は口にすることはできない」
「え～。マジかよ～」
ダークは一気にテンションが下がった。本当に食べたかったらしい。
「それなら…それなら見学させてください」
「見学？」
「はい、見聞を深めておきたいんです」
「…そうか…う～ん…それは困ったな…」
ミカエルはすっと後ろを向いた。
「ああそういえば。今君達は謹慎処分中の天使かな？　エデンに勝手に行ったということで」
「「「「えっ！？」」」」
４人は驚いて目を丸くした。
すでにミカエル様は知っていたのだ。
「ごっ、ごめんなさい。私は反対したんですけども」
スワローはさりげなく自己弁護する。
「あっ、汚ねぇぞ」
「なによ。本当のことよ！」
ダークとスワローの言い合いが始まる。セガルが慌ててそれを止める。
「あそこは禁止区域だ。行ってはいけないことは知ってるね？」
「…はい」

スワンは小さな声で返事した。
「…残念だけどあの場所は…」

ドンッ！！！！

いきなり地面が大きく揺れた。地上に立っていた４人の天使はバランスが取れず地面に転んだ。
「何だ！？」
「ミカエル様！」
門番が部屋に飛び込んできた。
「何事だ！？」
「地上からの攻撃です。光の巨大な玉が神殿に激突しました」
「光の玉？」
「はい！　今被害状況を確認…うっ…」
「！？　どうした！？」
「…なんだ…これは？　…体が…」
門番は地面に倒れこむと苦しそうに体を痙攣させる。
「…これは…まさか…」

「ひゅう～。すごいな！　高エネルギーが空に飛んでいきおった！」
トカゲのような男が飛び上がった。
「……」
「あ～しもた。わいも『十の獣』に入って『女神の血』をもろとくんやった。誘われたときは胡散臭かったから断ってしもうたんや」
「…あの国を壊すには足りないね。もう少し生贄が必要だ」
πは踵を返すと城の中へと入っていく。
「へっ？　なにが？」
「さっきの攻撃でまた天使がくるよ。…恐らく２０歳以下の天使かミカエルが…。まあ国を捨てたデーバの奴は来ないだろうけどね」

「えっ？　マジで？　大丈夫なん？」
「チェシャ。もし天使が来たら知らせておくれ。捕らえて最後の儀式の生贄としよう」
　チェシャと呼ばれた黒いローブの男がコクリと頷いた。
「ちょ、ちょっとまち！　天使ってあの天使？　あの凶暴で国民を食い殺した？　そんなのが来たらやばいんちゃうん？」
「大丈夫だよ―」
　πは紋様のある目で男を見つめた。トカゲのような男はその目にゾクリと悪寒をはしらせた。
「―この『女神の力』があればすべての物語を終わらせることができる」
　πは鼻歌を歌いながらその場を去って行った。
（…やれやれ。なんちゅう目で睨んでくるんや。このS級犯罪者『クロトカゲ』様もさすがにビビッたで）
　クロトカゲは城から周りの風景を見回した。
　そこにはすでに白い結界の光が空へと向かって何本も伸びていた…。

地雷草原の中で

記憶は唐突にその場面から始まった。

降り立った地面は血の臭いがした。

ザラザラとした砂は鉄の味がする。

風がふくたびに黄色い粒子が目を閉じさせる。

―これが現実なのか…それとも幻想なのか…反転した太陽の下で…

私はまだ区別するには幼かった。

「おいっ！　立て！」

長い銃を構えた男が私に向かって言った。成人した男の額からは透明な汗が何粒も流れ落ちていた。それが雫となってポツリポツリと地面に落ち、そのすべてを砂が飲み込んでいった。

「まあ待ちなさい」

兵士を別の男が止めた。その男の胸にはいくつもの勲章がつけられていた。

「大佐…しかし…」

「賭けの対象は丁寧に扱わないと。そうだろう？」

その穏やかな声の裏に微々たる狂気を隠し持っている男は、私を子犬のようにひょいと持ち上げた。

男は私の服をパンパンと払うと穏やかな笑顔で言った。

「お嬢ちゃん。ここにはね。何十という地雷が仕掛けられているんだ。僕達はそれを撤去しなくちゃいけないんだ」

まるで自分の子供をあやすかのように男は話し続けた。

「だけどね。僕の部下を危険にさらすわけにはいかない。だからお嬢ちゃんのような可愛らしい妖精さんを捕まえて、遊ぶ事にしたん

だ」
大佐の後ろにいる男達が「くくくっ…」と笑った。
男は私をおろすと前を指差した。
「ここをまっすぐ歩いて行きなさい。もし、お嬢ちゃんが生きて戻ることが出来たのなら逃がしてあげる」
私は男の言った通り先へ進もうとした。幼かった私は死の概念など理解していなかった。あるのは大人の言う事は聞かなきゃという素直で純粋な思いだけだった。
だけど私の体が反応しなかった。それは幼いながらも直感で危険を感じた体の正常な反応なのかもしれない。それを見た男はがっかりした表情を見せ、銃の先を私に向けた。
「おじさんはがっかりしたよ。お嬢ちゃんは妖精さんじゃなかったんだね…」
私はぼんやりと銃口の穴を見つめていた。そこから何が出てくるのか理解ができず、何故男ががっかりしているのかわからなかった。
男の指が引き金を引こうとした時、金色で綺麗な髪の女の子が私の前に立ちはだかった。
「待って！　私が彼女を連れて行きます！」
大佐と言われた男は思わぬ登場に少し顔をしかめたが、すぐにまた元の穏やかな笑顔に戻った。
「いいよ。2人で行ってきなさい」
「…行こう！」
金髪の女の子は大佐の言葉を無視した。そして私の腕を肩にかけると前へと進み始めた。
「あなた名前は？」
「…コモリ」
「私の名前はエリカ！　よろしくね！」
その子はとても明るくそう言った。
「あいつ等大嫌い。村を襲って捕虜を連れてきてああやって殺してるんだわ」

「捕虜？　殺す？」
「あなた両親は？」
「…知らない」
「…記憶がないの？」
「…うん」
「そう…なら同じだね！　私も両親がいないの！」
エリカはポジテブに返した。それはとても強い前向きな言葉だと思った。
その後エリカは色々私に話しかけた。親のこと、ペットのこと、友達のこと…。私はただ頷くだけだったが、エリカは気にせず話し続けた。
―そして、もう何歩歩いただろう。急にエリカが立ち止まった。
「……」
あのポジテブで明るいエリカがしゃべる事をやめた。顔には汗が流れ、開いた口から乾いた息が何度も吐き出された。
―それはこの先が危険地帯であることを示していた。
彼女は直感でわかったのだ。これ以上は進めない。これ以上進めば私達は―。
「…うっ…ううっ」
私の目から涙が流れ始めた。エリカの態度に不安と恐怖を感じたからだ。いや、エリカは不安を誤魔化すために話し続けたのだろう。
「あっ…ごっごめん」
エリカはすぐに謝ったが後の祭りだった。
「恐いよ…エリカ…恐いよ」
私はエリカにすがって泣き続けた。恐怖が私を覆い、心を握り締めた。その痛みが涙となってエリカの服を濡らしていく。
「……コモリ！」
エリカは急に大声を出して空を指差した。私は涙を流しながら嗚咽を止め、エリカの指先を見つめた。
…そこには青い空が広がっていた。

「―空を見上げながら歩いて行こう。お父さんもお母さんも天国にいるはずだから―」

エリカの指の向こう側に天国がある…。

私は見た。

「…大佐。あいつ等立ち止まりましたぜ」

射撃者が望遠鏡を覗き、エリカとコモリが立ち止まったのを確認した。

「そうですか。これから面白いことになりますねぇ」

大佐は地図を広げ地雷の位置を確認している。その地雷には番号が振られておりそれぞれに賭け倍率が書かれている。

「しかしいいんですかい？　クロトカゲに言われたとおり陣は造りましたがこんな遊びしてて」

「結構な額をいただきましたからねぇ。この国の貨幣は銀や金の含有率が高くて他国で売れば差額分儲かりますしね。それだけ今後は仕事をしなくてすみますでしょ？　だけどこのために購入した武器や地雷が錆びついてしまいます。永久に使える物は存在しませんからねぇ。もったないから使えるときに使っとかないと」

大佐はニヤニヤ笑うと5という番号に金貨を置いた。

「しばらく待てばまた動き出しますよ。逃げ出せば撃ち殺すだけです。さああなたたちはどこに賭けますか？」

「…じゃあ俺は逃げ出すほうに」

兵士の1人が欄外の賭け倍率に金貨を置いた。

「ほほ。まだまだ甘いですね。あの金髪の少女の目を見ましたか？

彼女は逃げ出しませんよ」

「それはすごい。それではあの地雷草原に立ち向かっていくと？」

「違いますよ。彼女は逃げ出せないことがわかっているんですよ。
―あれは『絶望』を知っている目ですからねぇ」

「…うん？」
見張りの兵が何かを見つけた。
「おい！　待て！」
それに声をかける。その人物は立ち止まる。
「…何者だ？」
兵士は銃口を向けた。銃口を向けられた男はニヤリと笑った。
「…帝国軍だ。ほれ。これが身分証明書」
男は手の平ほどの免許証を兵士達に見せびらかした。その身分証明書には帝国軍第四類・バインと記載されている。
「帝国軍？　あの巨大国家の軍隊か？」
騒動を聞きつけて何人かの兵士が駆けつける。それぞれ銃と腰には剣を携えている。それでもバインは動揺することなくただ余裕の笑みをうかべている。
「ここは管轄外だろ？　捜査権はないはずだ？」
「捜査権はなくとも『まともな』ことはしてないだろう？　あそこにいる2人の少女。…なぜあんなところに？」
バインは遠くで立ち止まっている2人の少女を指差した。
「ああ。あれはどっかの村から逃げ出した子供たちさ。俺達が保護してやろうと見張っているんだ。下手に近づくと逃げ出すんでね。それにあそこは『誰が仕掛けたか』しらんが危険物も混じってる。俺達も近寄れんのさ」
「それなら俺が助けてやるよ」
「それは駄目だ。お前が危ない」
「平気さ。こういうことには慣れてる」
「じゃあしょうがない。行くといいさ。俺達は邪魔をしない」
「信用できんね。まずはその危ない物おろしてくんない？」

「そうかいわかった」
兵士達は銃口をバインに向けた。
「…それが答えかい？」
「まあね」
「…はぁ～。なあお前等。俺が帝国軍第四類だとわかって何を感じた？」
「？　別に何も？　どっかの軍隊の一兵卒だろ？」
「無知ってのは時に怖い者知らず生むものだ」
バインは笑いを止めると剣を抜いた。その剣には刃がなく、丸い棒のような形をしている奇妙な剣だった。
「―無知ってのがどれだけ怖いか教えてやるよ―」
バインの黒い目が獣のように赤く染まっていった…。

帝国軍第４類

広大な砂漠では真っ赤な夕日が西に沈もうとしている。緑のサボテンが鋭い棘で爬虫類達を威嚇し、コヨーテが獲物を求めて動き始める。乾いた砂が空中を飛び、人の歩いた足跡を消していく。

私はこの夕日が嫌いだ。毎日、毎日血を連想させるからだ。

いつも泣いているこの場所に腰を下ろす。両膝を抱え顔をうずくまさせる。そして泣く。

今日も失敗してしまった。武帝の仕事を受けて私達の部族はマルスオフの大群と戦った。多くの死傷者を出すが、武帝王に認められるチャンスだった。認められれば巨大国家の一員としてあらゆる優遇を受けられる。それなのに私のミスで部族のリーダーに重症を負わせてしまった。

鮮血が飛び散り、乾いた砂が飛び交う戦闘の中、ミスの多い私はリーダーの護衛ということで後方にいた。その重要任務中にあの『２４エコーズ』の１人『ベルゼブブ』の部下が近づいていたことに気づかなかった。リーダーが倒される瞬間、私は氷のように冷たく固まっていた。

すぐに仲間が駆けつけ大事には至らなかった。だけど、もう部族にはいられない。皆の白い目が矢のように私の心臓に突き刺さる。

そうだ。私は向いていないのだ。向いていないのに女だからという理由で敵と戦わなきゃならないのだ。私達の部族では女の方が地位が高いばっかりに。

「…どうしたアナ？」

初老の男が私に声をかけた。部族の長だ。子供の頃からお世話になっている人だ。

「……」

「…ヴォレンスなら大丈夫ダ。彼女は戦士の中でも強く、優しく、勇ましイ。お前のミスなど気にもしないだろウ。それにお前の能力

は部族も皆認めていル」
それは私が得たい答えじゃなかった。
「…長」
私は泣くのを止め、辛そうな声で長に話しかけた。
「もう私は戦いをやめたイ。私は戦いたくなイ。血を見るのも嫌ダ。仲間が死ぬのも嫌ダ」
「……」
「何よりも自分自身死にたくなイ。…どうして女だからといって戦わなきゃならなイ？　私は背も小さいし、体も大きくなイ。適正ではないのにどうして戦場に行かなくてはならなイ？」
「それは我等部族が昔から培ってきたルールだからダ。実際我等は男よりも女の方が強イ」
「だけど私には向いていないイ！」
私は大声で怒鳴った。誰に聞こえてもかまわなかった。そしてまた私は泣き始めた。
「…私は子供を生みたイ。いっぱい、いっぱい生みたイ。そしてその子達のために働きたイ。外へ出てマルスオフやエコーズなんかと戦いたくなイ」
「それがアナの考える幸せカ？」
「…うん」
長は黙って空を見上げた。
もう太陽は沈んでいる。暗闇から輝く星たちが姿を見せ始めた。その中の1つが滑り落ちるように流れ、遠くへと消えていく。
「アナ。ここから出て行きなさイ」
「…えっ？」
長の言葉に私は絶望の声を上げていた。
「―あの星のように旅をしなさイ。世界はこんなにも広いのだから―」

（…歩兵が５０人。装甲戦車が２車か…。結構厳重だな。いったい何をしようってんだ？）
バインは素早く数を数えると、冷静に今の現状を分析し始めた。
（俺が『赤眼化』できるのは最低１時間。これだけの人数なら十分だろう。後はお姉さんがなんとかしてくれる）
「…おい。あいつ、目の色が黒から赤に変わったぞ？？」
「マルスオフか？　まさかエコーズじゃないだろうな？」
「馬鹿。あいつらは化け物だ。まれに人型がいるようだがあれは確実に人間だ」
兵士達はバインの様子が変わったことに動揺している。
（ちっ、帝国軍第四類を知らなかったわけだ。とんだ田舎出の兵士だぜ。だからこんな辺境来るのは嫌だったんだ…って俺が言い出したんだっけ？）
「…まっ、いいや」
バインは剣を背に乗せると赤い目を見開いた。
（湿気が少ないからあの装甲戦車を止めるのは無理だが銃ぐらいなら…いける！）
「―レトリックの名において命じる。すべての物質を凍らせろ！」
術を唱えると同時に宙へと飛び上がる。５メートル以上飛び上がったので兵士達は口をアングリと開けたまま応戦できない。
「まずは３人！」
バインは兵士達の中へと無理矢理入り込むと剣を一振りする。一瞬で３人の兵がバインの攻撃を受け、後方へと弾き飛ばされる。
「４人！」
後ろにいた兵士の顎に剣を突き立てる。剣には刃がないので、硬い物が激突したような「バキッ！」という鈍い音とともに兵が首ごと宙に浮く。
「…なっ！　うっ、撃て！！」
ようやく反応し始めた兵士が銃の引き金を引く。

「！？　銃が凍って…」
バインの剣がその兵士の銃を破壊し、脇腹へと入る。銃は光に反射し、キラキラと輝きながら砕け散っていく。
「５人め！」
「魔術か？　剣だ！　剣で応戦しろ！」
兵士達は凍りついた銃を捨て、剣を抜いてバインに襲い掛かる。しかし、バインは怖気づくことなく、兵士達の剣をなんなくかわし、常人ではありえないような速さで攻撃を繰り返す。
「６！　７！　８！　９！」
４人の兵士が地面にめり込み、木に激突し、痛みでうめき声を上げながら倒れていく。
「ば…馬鹿な…」
バキッ！！
戦意を失い、呆然と立ち尽くす兵士にバインの蹴りが顔の側面に入る。そのままその兵はピクピクと体を痙攣させ、意識を失った。
「―１０人めと」
バインの赤い目がその他の兵士を睨む。兵士達は百獣の王に睨まれたように、体に震えと恐怖と困惑が走っていった。

「レベッカー大佐！！　大変だ！！」
「はいはい、知ってますよぉ」
レベッカーは状況を察してすでに戦車の中に非難していた。上部の出入り口からバインが戦っている様子を傍観していたのである。
「なんなんだあの化け物は！」
「彼らは化け物じゃありませんよ。特異抗体体質といって『神脈を繋げる者』。いわゆる『赤眼化』できる人達です」
「人間？　人間なのか？」
「う～ん…あの跳力、一振りで人間３人を弾き飛ばす攻撃力、手馴れた兵士の剣をあっさりかわす瞬間反射神経、察知能力。さらに魔

術には普通煩雑な儀式や長文のような言語による詠唱、及び生贄が必要なのですが、『力を貸す存在名』＋『発動言語』の一桁で術を発動させてしまう『一桁詠唱』。そして直接攻撃をしながらも、間接的に敵の殺傷能力の高い武器を封じ込める緻密な戦略。…もはや人間ではないですねぇ。化け物と言った方が正しいのかもしれません」

「どっどうすればいいんだ！」

「答えは簡単ですよ。逃げるんです」

「へっ！？」

「私の国では帝国軍第四類、いわゆる『死帝』と出会ったら逃げましょうという戦術がありますからね」

「たった1人だぞ！」

「わかってませんねぇ。あれは1人でも大軍に匹敵してしまうのですよ。じゃ、私は逃げます」

レベッカーは戦車の蓋を閉じようとしたが、誰かに押さえつけられた。

「？」

報告しにきた兵士の胸が斜めに切り裂かれ地面に倒れていた。レベッカーの耳に冷たい女の声が響き渡る。

「…見つけたゾ。お前が大将だナ？」

その女は太陽を背に斧を首元に近づけていた。氷のように冷たい斧の刃が、首に鋭く当たっている。

「いいえ違います。私は大将ではありません」

レベッカーはすぐに嘘をついた。

「嘘つケ。前線がやばくなったことに気づいたらすぐに下っ端が上に報告に行くものダ。あの兵士は真っ直ぐお前の所に行っタ」

「はは。冗談です。そうです。私が大将です。降参しますからその斧をどけてくれませんか？」

レベッカーは両手を空へと挙げた。

「……」

アナはレベッカーの首元に斧を近づけたまま顔を凝視した。
「おや？　これはこれは可愛らしいお嬢さんじゃありませんか？妖精さんかと思いました」
「…お前、見たことあル」
「気のせいですよ」
レベッカーは微笑みを崩さないままやんわりとアナの質問をかわした。
（語尾に変な言い回しをつけますねぇ…これは高貴な5大帝国出身者ではありませんね。黒色の肌、黒髪、民族衣装、かなり戦闘慣れしている。ハンター…いやどこかの帝国の下請け部族か…）
レベッカーがアナを分析し始めると同時に、1人の兵士が仲間を殺され、興奮して叫んだ。
「くそっ！　テメーも仲間か！？」
もう1台の戦車がアナとレベッカーに向けて砲弾を向けた。
「あっ、ちょっと。私は降参してるんです。あなた達も無駄な抵抗は止めて降参しましょ？」
「うるせー！！　こっちはただの日雇いじゃ！！　誰がお前の言うことなんて聞くか！！」
「ああまったく。これだからこんな部下をもつのは嫌だったんだ」
「愚痴なら死んでから言え！！」
主砲が2人に狙いをさだめる。
アナはゆっくりと戦車に向かって斧の持っていない左手をかざす。血のような真っ赤な両目が主砲を睨んだ。
「―エンプネスの名において命じル。潰れロ」
ドンッ！！
急に戦車の主砲が折れ曲がり、車体へとめり込んでいく。兵士はすでに発射スイッチを押していたので砲弾が途中で主砲の壁にぶつかり爆発した。
「…おやおや…だから言ったのに…」
戦車は火に包まれ、兵士もろとも黒ずみへと化していった。

「うわ～。こんな化け物と戦うなんて聞いてないぞ～」
「ちくしょう！　割りにあわねぇ！」
「もう俺やだ～」
兵士達は2人の強さに恐れを抱くと、蜘蛛の子のように一目散に逃げ出した。
残されたのはアナとバインとレベッカーの3人だった。バインに倒された兵士もいつの間にか逃げ出していた。
「よ～し。無事終わった～」
バインは『赤眼化』を解除するとアナの元へと駆け寄った。
「さすがだねぇ。お姉さん。そいつがボスか？」
「そうダ。バイン。こいつを捕まえといてくレ」
アナは戦車から降りると2人の少女の元へと走っていく。

アナが2人の少女の元へ駆け寄ると、コモリがサッとエリカの後ろに隠れた。エリカも得体の知れない人間に警戒の色を隠せない。ただ、遠くで2人の戦いを見て、自分達のために戦ってくれたのではないかという思いがエリカの中に生まれつつあった。
「はは。安心しロ。お前達を苛める奴らは私達が倒しタ。もう大丈夫ダ」
アナは明るい口調で2人に話しかけた。それでもエリカとコモリは気を緩めない。
「ああこの眼だナ。これは魔術ダ。…ほら解除すると赤くなくなるだロ？」
アナは『赤眼化』を解き、2人に歩み寄ろうとする。エリカの方は少しだけ警戒を解いていったが、まだコモリが後ずさりする。後ろには危険な地雷が仕掛けられているにもかかわらず。
アナはそのまま歩みを止めず、2人の少女に抱きついた。
「きゃ！」
コモリは小さく悲鳴を上げると、アナから逃げ出そうとジタバタ

と暴れる。それでもアナが離そうとしないので「い～や～！！」と叫び、ガブリと腕に噛み付いた。コモリの目からは恐怖からか自然に涙が零れている。

「はは！！」

アナは痛がらず、怒らず、逆に楽しそうに笑いながら2人に言った。

「―よく生きてたナ。お前達。えらいゾ。本当にえらいゾ」

アナは2人を押さえつけるどころか、優しく、静かに、嬉しそうに、2人の耳元で囁いた。

「……」

エリカは安心したのか気が抜けたようにアナの腕にすがりつく。

「……」

コモリもアナの腕から口を離した。アナは白い歯を見せて気にしてないように笑うとコモリの頭を優しく撫で、そして包み込むように抱きしめた。

コモリはそのまま安心したように目を閉じた―。

「…おやおや彼女においしい所もってかれてますよ？」

捕縛されたレベッカーは嫌味のようにバインに言った。

「いいんだよ。―あの役はお姉さんの方が適任だ」

バインは3人の様子を見て嬉しそうにため息をついた…。

魔法陣の中で

旅に出る時、親は何も言わなかった。私がコソコソと旅立つ準備をしている時も、見てみぬふりをしてくれた。

まだ太陽が昇っていない早朝に、私はテントから抜け出し、外に出た。昼は灼熱のように暑い砂漠も、朝は恐ろしく冷える。とりあえず長が言っていた軍の国家資格を受験してみよう。それなら私でも採用されるかもしれないということだった。

本当は戦うのは好きじゃない。だけど今の私にはこれしかない。いつか自分の夢が叶うように一歩一歩踏みしめていかなくてはならない。

長から貰った軍の受講要領、薬草や内服薬、自分の愛用のトマホーク、多少の金塊と銀塊。忘れ物はもうないな。

部族のテントを振り返ることなく、目的地に向かって歩き始めた。

「アナ…」

急に声をかけられた。ギクリとして立ち止まる。

「…レン」

涙目になりながらレンが私に近づいてきた。私は少しホッとした。

「アナ」

バズとカイもいたようだ。いつも生意気な顔をしているバズも今回ばかりは顔が歪んでいる。

レン、バズ、カイは部族の子供たちだ。まだ小さく戦闘には出て行けない。

「どうしタ？　出迎えに来てくれたのカ？」

比較的明るく笑うともうレンが泣き出した。レンは女の子だがまだ訓練は受けていない。

「おいおい、どうしタ？」

「だっテ…アナが出て行くなんテ…」

「どうして知っていル？」

「長が教えてくれタ」
そうか。それでみんな来てくれたのか。
「ありがとウ。レン」
レンをそっと抱きしめると、声を殺して私の胸で泣いている。だけど不思議と決心が揺るがない。私は動揺しない。
「アナ…コレ…」
カイが赤いハチマキを私に差し出した。
「これハ？」
「3人で赤い花をかき集めて造ったんダ。結構苦労したんだゼ」
バズが鼻をすすりながら言う。
「…ありがとウ」
「みんなで一生懸命造ったノ…グスッ…だから…だから忘れないデ…きっと帰ってきテ」
レンはグシャグシャな顔で私に言う。
「そうだヨ。アナはへたれダ。きっと外に出たってうまくはいかないイ。失敗して戻ってくればいいんダ。そして俺の…」
バズが素直じゃない言葉を投げかける。その後は後ろを向いて泣く。
「アナ。気をつけテ」
カイはそれだけ言うと赤いハチマキを私に渡した。
「…大事にするヨ。ずっとずっと大事にするヨ。お前達のことは忘れなイ。私達はずっと一緒ダ」
そのハチマキをしっかりと頭に結びつけ、私は手を振って子供達と別れた。
（―帰る…か）
きっとそれは部族の掟上無理なことだろう。それにこの危険な世界で私がこの地を踏むことはもう無理かもしれない。そんなことを考えていると、急に今までの思い出が頭の中を駆け巡った。
（…ウウッ…グスッ…）
声を殺して泣く。孤独による不安。見えない敵による恐怖。無知

なことによる疲労。すべてが混ざり合って私の体を止めようとする。
だけどそんな意思に反して、私の足は砂漠の向こう側へと歩き始めていた―。

２つの生命が私の腕の中で鼓動している。暖かくて、柔らかくて、とても心地がいい。この子達を見ていると部族の子達を思い出す。
レン、バズ、カイ…みんな元気だろうか？　みんなと別れていったい何年たっただろうか？　最後に別れの言葉を言ったのはいつだっただろうか？
「…うン？」
金髪の少女と黒髪の少女が目を閉じたまま動かない。
「…そうカ」
口元が緩む。恐らく極度の緊張状態から開放され気を失ったのだろう。２つの魂を宝石を抱えるように抱きしめる。
ヒュー…
一陣の風が吹いた。別に何が起こるわけでもないただの風だ。
「…？」
空の上から黒い物がヒラヒラと紙のように落ちてきた。風に乗せられながら右へ左へ靡いている。それが偶然なのか、それとも必然なのか私から数十メートル先へと身を落とした。
それは地面へ降り立つと、ニョキと立ち上がった。まるで地面からはえてきたようだ。真っ黒のローブから何かが光った。それは鋭い牙だった。その牙が耳元まで裂けていき、私に向かってニヤリと笑った。
『―やあ。久しぶりだね。首狩りの女王―』
そう…聞こえたような気がする。
黒い物はまた風に乗るとヒラヒラとどこかへ飛んでいった…。

「さてと。それでは尋問させてもらうがここで何してた？」
バインはレベッカーに剣を向けた。
「変わった剣ですねぇ。刃がまったくない。棍棒のようだ。それは人の命を取らないという事ですか？」
「話を逸らすな」
「いやいや、失礼しました。別に何も。見てのとおり少女を村から誘拐して遊んでいただけです。黒髪の少女はこの辺りを呆然と歩いていたのを捕まえました。金髪の少女は川で洗濯してた所をついでに捕らえました。あとは…爆死してしまいましたのでわかりませんねぇ」
「丁寧に非道な事を言うもんだな」
「おや？　これが非道ですか？　私はもっと非道なものを見てきましたけどねぇ」
「そうかい。なら嘘をつくのはやめたらどうだ？　グラビドドンのレベッカー」
レベッカーの微笑みが止まった。
「グラビドドンと言えばうちの国の国境近くで暴れまわってた国の名前だ。あの『２４エコーズ』が出てきてからはさすがに沈静化したみたいだがね。未だに帝国と連合を結ぼうとしない」
「……」
「その国で軍事を担当し、帝国軍に対してかなりエグい戦略で抵抗していた奴がいた。グラビドドンのレベッカー。帝国軍内では有名だぜ」
バインはレベッカーの情報を頭の中から引き出す。貴族誘拐による持久戦、人身売買による裏金、傭兵部隊による奇襲戦…数えていたらきりがない。
「…やはり誤魔化しはききませんか。賞金首になっているみたいですしね」
「ああＢ級犯罪者に認定されている」
「それは光栄です」

レベッカーは「ふう」とため息をついた。
「『赤眼化』といいましたっけ？　コントロール不可能とされた自然現象を操ることができる『神』と呼ばれた『13人の赤眼の者』の力を借りることができる。魔術の中では最高位。帝国が巨大国家に発展した理由の1つだと聞いています。それとあなたのような『死帝』採用試験を受けるはハンター出身者が多く、『赤眼化』持続時間1時間以上が受験条件。筆記、技能、捕縛試験を突破しなければならない」
「よく知ってるじゃないか」
「遊撃部隊として各地に回っているのは敵を殲滅するだけではなく、帝国軍の品質を広報するため。そのために免許をわざわざ敵の前に出さなければならないんでしょ？」
「…よく知ってるじゃないか」
確かに理由はわからないが敵と交戦する場合免許携帯が義務づけされている。俺はてっきり敵を威嚇する意味で免許を出すものだと思っていたが、レベッカーの言うとおりそういう意味もあるかもしれない。
「恥ずかしくありませんか？　わざわざ敵に身分を明かすなんて」
「…正確には違う。免許を出すときはこっちの権限を行使するにあたって身分証明をするためだ。例えばエコーズなんかに免許だしたって意味ないからな」
「クク…違いありませんねぇ」とレベッカーがニヤニヤ笑う。こんな状況でよく余裕でいられるなと思う。
「そういえばランク付けされていましたねぇ。免許番号からわかるのですがここにはレテランスがありませんからね。あなたは何番ですか？」
「それは…10…19ぐらいだ」
特に答えなくてもいいのだがついバインは見栄をはって嘘をついた。
「へえそれはおかしいですねぇ。確か19位は二刀剣術のガバメン

トのはずですが…」
「…お前、実は知ってて言ってない」
「ほほ。実は知ってます。バインという名前でわかりました。ランクは最下位の５０。たぶんあの子は４９位のアナさんでしょ。『最下位コンビ』として有名です」
「くっ…最悪だ。こんな辺境にまで悪名が広がってるとは…」
バインは恥ずかしさで手で顔を覆った。なによりも嘘ついてランクを上げてしまったことがかなり恥ずかしい。
「いやいや。正直馬鹿にはできません。―最下位でこのレベルなのですからねぇ」
レベッカーは感嘆するように言った。
「もう話をズラすのはいいか？」
「ええ。お話しましょ」
（えらく簡単に承諾するもんだな…）
バインは少し不審に思ったが、レベッカーは真剣な顔で話を始めた。
「陣をはってたんですよ」
「陣？」
「魔法陣です。円や数字、紋様をいくつも重ねあった…一種の魔術です」
レベッカーは戦車から体を出すと戦体に「よっこいしょ」と腰をおろした。野太い筋肉にいくつもの傷がついている。ベレー帽をかぶった顔は目ジワがあるものの年を感じさせない。
（さすが百戦錬磨の戦略家だけはあるな…）
「これぐらいはいいでしょ？」
「…話を続けろ」
バインは気を抜くことなくレベッカーに剣を向け続ける。
「あるお方に頼まれましてね。仕事内容はこの先にあるドラゴニの住人をここから出さないこと…まっ、あなたたちが来たということはたぶん抜け道とかで誰かが出ていたと思いますがね、そういうこ

とです。次の依頼は捕縛した住人達の血を地面に効率よく染めさせること。血液吸収型の魔法陣らしくて専門的なことはわかりませんが、エネルギーを循環させるのに必要だそうです。実際捉えたのは１０人前後。体内から血を出させるために首や四肢を切断しました」
「…ろくな事してないな」
バインは顔をしかめて言った。
「まあそれだけです」
「それだけ？　１０人でいいのか？　それに魔法陣ってのはそんなに簡単に出来るのか？」
「私もそう思って報告しましたが別にいいということでしたよ。きっと魔法陣はすでに描かれていたんでしょう。まああのお方にとっては１人でも住民に逃げられるのが嫌みたいでしたがね」
「…どうして１０人だけなんだ？　何かあれば１０人どころじゃないだろ？」
そう。国に何か災害があれば１０人どころじゃなく国民全体が動くはずだ。
「さあ。それは私にもわかりません。ただポイントに配置していた兵からの報告だと命からがら逃げてきたといった感じだったそうですよ。私達に捕まったときはそれはもう絶望してました」
虫唾が走るような言い方だなとバインは思った。
「それで。あの方とは？」
「そうですねぇ…ねえバインさん」
「話を逸らすな」
「いえ。あそこの空間歪んで見えません？」
レベッカーが空を指差した。レベッカーを警戒しながらバインが指先を追ってみると、確かに空間に歪みが見える。いや、もしかすると何かのエネルギー熱が発生し、光を捻じ曲げているようにも見える。
「―おや？　おかしいですねぇ…もしかしてあのお方…Ｓ級犯罪者『π』…―」

ジュッ！！
バインがレベッカーに向き直した時、すでにレベッカーの姿が見えなくなっていた。
戦車の上にあったのはレベッカーの手首だけだった。
「バチッ」と何かが鳴った瞬間、バインは本能的に危険を感じ、戦車から飛び降りた。
ドンッ！！！！
戦車が弾け飛んだ。何が起こったのかまだ頭の中で理解できないバインは、慌ててその場から離れた。

「！！　なんダ！！」
異様な爆音にアナはバインのいる方向へと視線を向けた。するとそこには奇妙な光景が広がっていた。重さ何tもある巨大な戦車が空中に飛び上がっているのだ。
「おっ！　おっ！　お姉さあああぁぁぁ～ん！！！！！」
バインが叫んでいる。叫びながら全速力でこちらに向かってくる。その後ろでは巨大な光の棒が天へと何本も昇っている。
危険を察知したアナは2人の少女を両脇にかかえると一目散にその場から逃げ出した。
「なっ！？　俺を置いてくな！！」
「お前ならなんとかするだロ！！　今はこの子達が優先ダ！！」
バインは大声を叫びながらアナの後ろまでちゃっかりと追いついている。アナは2人分の重さを気にすることなく走り続ける。
「なんなんだこれハ！？　あいつはどうしタ！？」
「蒸発した！！　跡形もなくなった！！　手首はあったが忘れた！！」
「なんだト！！　報酬金はどうするんダ！！」
「こんな時に金のことといってる場合か！！　あっ、でも手首持ってくればよかった！！」

アナがチラリと後ろを見ると光の棒が2人を追いかけるように迫ってくる。
「なんだあれハ！！」
「知らん！！　ものすごい熱エネルギーだ！！　一瞬で人一人消し去るぐらいだから１０００℃は超えとる！！　そして背中が熱い！！」
「どうして私達を追ってくル！？」
「光に聞いて！！」
あまりの突然の出来事に2人とも思考が回らなかった。とにかくあれから逃げなければという必死な思いで走り続けた。
「なア！！　おかしいと思わないカ！！」
「なにがよ！！」
「周りをよく見ロ！！」
アナに促されてバインが見回すとそこは異常な事態へと変化していた。
「なっ…なんなんだ！！！！」
他にも光の棒が何本も地上から天へと向かっている。その数は数百…いや数万だろうか。まるで光が狂乱しているようにうねうねと動き回っている。
「あの光の目的はなんダ！！　やけに規則的に動いているゾ！！」
「あっ！！　そうか！！」
「どうしタ！！」
「さっきレベッカーの奴が魔法陣がどうとか言ってた！！　もしかするとそれが発動したのかもしれん！！」
「マジでカ！！　うわっ！！　私見るの初めテ！！　はは綺麗ダ！！」
アナは始めてみる光景にはしゃぎ始めた。いくつもの光の棒が天へと上っていく。それはエネルギーの断片をあらわしているのだ。
「喜んでる場合カ！！　魔法陣は普通最高でも２００００へーべぐらいだぞ！！　それにこのエネルギーの質量といい巨大するぎるわ

！！」

「あっ、あの～」

気の抜けた声が2人の耳に入る。どうやらエリカが揺れで気絶から起きだしたようだ。反対にコモリはヨダレをたらして楽しそうに寝ている。

「この子はいいな！！　大人の苦労もしらないで！！」

バインはすでに涙声だ。

「おウ！！　起きたのカ！！　今は危ないから気絶してていいゾ！！」

そんな事言われてもできるはずがないとエリカは思った。

「森の方へ向かってください。この魔法陣は外郭に特殊な紋様を施し、中心点に向かってエネルギーが貯まるようにできてます。その中心点はドラゴニの城の上です。森に入れば魔力の水も道のない所へは流れないでしょう」

「そうか！！　この光は魔法陣作成者が造った道を流れているにすぎないから！！　森なんかの障害物があった場合道を造ることができなかったということだ！！」

「言葉がおかしいゾ！！　落ち着け！！」

「できるか！！　もう苦しいんだよ！！　息が止まりそうなんだよ！！　それに背中がチリチリと熱いんだよ！！　てかこれはもう熱いを通り越して痛い！！」

「あっ！」

エリカが呟くように叫んだ。それと同時に何かが天から落ちてきた。それは地上にぶつかると「ドチャ！！」という気持ち悪い音をたてて弾けた。

「こんどは何！！　もう何がきても驚かんぞ！！　かかってこいや！！」

「見ロ！！　空からたくさん落ちてくル！！」

バインがチラリと空を見上げると確かに黒い物が次々と地上へと向かって落ちてくる。右左前横と順番も落下目的も不規則だ。恐らくこの魔法陣内の範囲すべてから落ちてきているのだろう。
バインは激しい呼吸による酸欠で視界がぼやけ、もうそんなものはどうでもいいように思えた。
「きっと岩か何かだ！！　とにかくあの森へ行こう！！　もうすぐ着く！！」
「よシ！！　お前舌かむなヨ！！」
アナはエリカに言うと脚力を上げ、さらにスピードが上がった。
「ぬおっ！？　おっ、おっ、お前は……あっ駄目だ酸欠で何も浮かばん」
バインは先へとさっさと行くアナを追いかけるような形で何とか森へと滑り込んだ。すると、2人を追いかけていた光は宙を飛び、中心点へと向かって走り去っていく。どうやら少女の言ったことは本当のようだ。
「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ…しっ、死ぬ。こんなに走ったのはマルスオフレッド認定に追いかけられたいらいだ。酸素が足りねぇ…」
「よしよシ。大丈夫カ？」
アナは2人を木陰に下ろすとパンパンと服についた埃を払ってやった。
「ありがとうございます」
エリカが丁寧に頭を下げた。
「面白かった～」
コモリがピョンピョンと飛び上がった。どうやらすでに意識を回復していたようだ。バインは怒る気も失せ、地面に大の字に倒れた。
「あっ」
「うン？　なんダ？」
「血が…」
エリカがアナの肩の部分の服についている赤い液体に気づいた。

「血？　何の血だロ？　いつついたのかナ？」
アナは首をかしげた。
レベッカーとの戦闘は無傷のままで終わったはずだ。兵士の返り血も浴びていない。
そういえばさっき黒い物が天から落ちてきたときに、地面にぶつかって飛び散ったものが服についたような…。
アナはペロッとその液体をなめてみた。
（…人の血の味がすル…）
アナは森の外を見た。光の棒は光の柱となり、規則的に魔法陣内を循環している。天から落ちてきた黒い物はいくら探してもどこにも見当たらない。
（…気のせいカ…悲鳴も叫び声も聞こえなかったシ…）
アナはあまり気にしないことにした。
「はっ！！！！」
バインが急に立ち上がった。
「どうしタ！？　バイン！？」
この液体について何か気づいたんだろうか？　呆然と森の外を見つめている。それに目が激しく動揺している。
「…なんてことだ…」
「何かわかったのカ！？」

「…俺の心のアイドル。帝国政府広報統括官、第5皇女『紅紀（こうき）』様のプロマイド写真落としちゃった…」

バインは両手で顔を覆うとシクシクと泣き始めた。演技ではなくマジ泣きである。そうバインが『死帝』に入った理由はいつか紅紀様の護衛を引き受けたいからである。
「…バイン」

アナは同情するようにポンポンとバインの背中を叩いた。
「プロマイド写真？」
コモリが疑問の顔でエリカを見た。エリカはクスッと笑うとコモリの頭を優しく撫でた。
「…どうやら信用してもよさそうですね」
あの武装兵達をたった数分で壊滅させた2人の男女。その強さとは裏腹に、ちゃんと人間らしい心を持っている。
それだけで私は彼らは信用に値すると判断できた。
「また盗撮すればいいサ」
「そだね。お姉さん」
「盗撮って何？」という顔をコモリに向けられ、エリカは言葉が返せなかった。

天使が舞い降りて

「ああ～やってもうた」

クロトカゲは1人城の出入り口の白い階段に腰を下ろすとため息をついた。

城の庭園は広く、青々と茂った芝生や色のついた花壇が見渡せる。それに壷をもった女神様からキラキラと光る水が流れ、噴水場を神秘的なものにしていた。これらの手入れはすべてチェシャ1人でしているのである。

そんな光景をボケッと見ながら「無駄なことをしよる」とクロトカゲは呟いた。

「まさか契約書に術の完成と同時に報酬金を受け取ることになっとるとわな。てっきり仕事を完成させれば貰えるとばかりおもうとった。今の儲けは三分の一や。レベッカーの奴に金渡してもうたらスズメの涙ほどしか残ってない。ああ～こんなことならレベッカーなんか雇うんやなかった。あんな簡単な仕事でこれだけ稼げるんや。大儲けやん」

城は静寂に包まれ誰もクロトカゲの声に耳を傾けない。人の声も、鳥の声も、虫の声ですら聞こえない。空には光の柱が静かに魔法陣を循環している。

「でもな。これには理由があんねん。今回この報酬額を見てわいも怪しいおもたんや。けどあのS級犯罪者『π』の依頼と聞いて納得したんや。これはぜひ成功させなあかんと思ってあのレベッカーを使って人材集めにはしった。あいつは優秀やし、人集めがうまい。それに契約はきっちり守る。もし帝軍なんかに捕まってもわいの名前はださんはずや。そのおかげで無事魔法陣は完成した。そこまでは良しや」

クロトカゲは1人で納得した。

「しかしπの奴。術を完成させないと駄目だといいおる。そのため

には天使がもう1人必要なわけや。さっそくチェシャっていう獣臭い奴が偵察に向かった。いつも黒いローブを身に着けてて辛気臭い奴やけどな」
意味もなく空を見上げる。光の柱が何事もなく動く。それはまるで蠢いているようにも見える。
…あの光の柱…あと一本足りんわけか…。そうや。あと1人や。あと1人いれば術が完成し、わいに大金が転がりこんでくるんや。
…しっかし、まさかレテランスにこっちの情報が漏れてるとは知らんかった。πの奴、国民は全員殺したとか言いおるから安心しとったのに帝軍の奴がこっちに向かってるやん。…これははよせな今迄の苦労が無駄になるなぁ…。
…うん？　空に何か飛んでいる。さっきの高エネルギーの集合体のせいで空を飛べる生き物は蒸発したはずや。それに土は今エネルギーを吸収するために生命力の弱い生き物も飲み込んでいきおるしな。
まさか…本当に天使か？
クロトカゲは立ち上がり背伸びをしてそれを見続けた。それは4つに別れており白い羽が見える。それに微かだが人間のような形をしている。かなり高い高度にいて見えずらいが間違いない。
天国なんてあったんやな。びっくりや。てっきり若いお姉ちゃんの所にしかないおもてた。
クロトカゲの目が細くなりターゲットを見定める。
…背丈は小さい。あの凶暴そうな天使やないな。ってか。あの天使はほとんどマルスオフやんと突っ込んでしもうたしな。
クロトカゲの口から細い舌がニョロリと伸びた。
「…ククッ…わいは運がええのぉ…。ここは大儲けするためや。よしっ！」
クロトカゲは階段を飛び降りるとさっそく天使達を追いかけて行った。

「あの…」
エリカがアナに話しかけた。バインは木の枝を探している。
「うん？　なんダ？」
「あの地雷場所はどうしてわかったのですか？」
「簡単ダ。レベッカーの戦車の中に地図があったロ？　あれを一目見て覚えタ」
アナは一般常識はすぐに忘れてしまうのに、命がかかっているものに対しては能力が高まる。
「…すごい…」
エリカはあらためて2人の戦力のすごさがわかった。
「ほれっ！」
バインが拾った木の枝を光の柱におもいっきり投げ込む。ジュッ！！　という音をたてて木の枝が蒸発した。後に残っているのは焦げくさい臭いだけだ。
「駄目だ。あの光の柱の幅は1本3メートル、奥行き2メートルってとこか。2本の柱の間隔は4メートルぐらいだから走ればなんとかなるかもしれないが、黒焦げは必須だな」
「ふう」っとバインはため息をついた。
「まっ、とりあえず自己紹介といこうか」
バインは2人の少女に振り向いた。
「あっ、私はエリカといいます」
「コモリ～」
エリカはちょこんと頭を下げ、コモリはニコリと笑った。
「俺の名前はバイン。皆からクールな『暁のバイン』と呼ばれている」
「私はアナダ。皆からは神秘的な『月のアナ』と呼ばれてル」
「「2人合わせて…『アルテミス』だ！！」」
アナとバインは前から決めていたポーズを2人の少女に披露した。
「……」

「……」
エリカはなんていったらわからないような困惑した表情で2人を見た。コモリは興味がないのか光の柱をボケッと見ている。
（…お姉さん。明らかに困ってるよ。それにあの子なんてまるで興味を示してないし。やっぱり『最下位コンビ』という悪名からは逃れられないんじゃ）
（違うゾバイン。対象年齢が高すぎたんダ。もっと年齢をおとしてやるべきだっタ）
（ええっ！？　そんな問題！？）
「…あのぉ～」
エリカはたまらず2人に話しかけた。
「お二人はここへ何しに来たのですか？」
「うんっ？　ああ。俺達は帝国軍第４類所属バインとアナだ。ここへは『ドラゴニ国の調査訪問』ということでやってきた」
「最初から普通にそう言えばいいのに」とエリカは思ったが、言わないことにした。
「帝国というと…この大陸のほぼ半分を支配下に置いてる？」
「そうだ。レテランスの依頼でね。ドラゴニ国から来たと名乗る男からの依頼らしい」
「…どうしてそんな素性の知れない男からの依頼を帝国が受理したのですか？」
エリカが疑わしそうな顔でバインを見る。
「理由は簡単だ。ドラゴニの通貨は金銀の含有率が高い。恐らく鉱山か何かを持ってるんじゃないか？　それで今後の取引相手として都合がいいんだろ」
「…そんなところでしょうね」
エリカは少し残念そうな顔をした。
「やけにクールだナ？　お前は何者ダ？」
「私は…私はただの村民です。ここから西に行った所の村に住んでいます」

「へえ。いくつ？」
「今年で１３歳です」
「しっかりしてるねぇ。顔つきでわかる」
バインは感心したようにウンウンと頷いた。
「じゃあお前は何歳ダ？」
「私…私わかんない…」
コモリは指を口にくわえ首をかしげた。
「まあ５歳かそこらだろ。とりあえず結論としてはドラゴニは異常事態が起こってると言っていいな」
バインはポケットから地図を取り出すと地面に広げた。
「この魔法陣はおそらくドラゴニの城を中心点として…」
地図に描かれている城の絵にコンパスの針をさしこむ。
「ここまでの範囲まで囲まれているといっていいだろう」
グルリとコンパスを回す。すると綺麗な円が地図に描かれた。
「かなりの広範囲だナ。半径１０キロ以上あル」
「でもおかしいです」
エリカが手をあげた。
「魔法陣をここまで描くには大掛りな作業が必要なはずです。私は村からたまにこの周辺までくるのですけどそんなの見たことがありません」
「…ふむ…人の血を吸収し、描けもしない魔法陣の発動か…。ちなみに城へは行ったことある？」
「あっ、えと、ありません。あの武装兵達がウロウロしてたから…」
「おそらく、この中心点から何らかの方法で魔法陣が完成しているんじゃないか？」
バインが地図の中心点を指す。
「どういうことダ？」
「つまりだ。中心点の周りに巨大な魔法陣を完成させておいて、その形式を外郭へと放出しているわけよ」
地図を丸く指でなぞり、外に向かってポンと叩く。

「すると、外に出たエネルギーは再び中心点へと戻ろうとするから、性質上他のエネルギーを吸収しながら中心点へと戻る。その時に設計された魔法陣のとおり、まあ擬似魔法陣ともいおうか、エネルギーは地面に沿っていくからあんなウネウネした光の柱が完成する。そして中心点へと戻ったエネルギーは循環をへて巨大な魔力へと変換されているというシステムだ」

「へぇ～。すごいなバイン」

「まあね。もっと言って」

自慢げにバインは顎に手をやった。

「でもそんな高度な魔法陣を描ける奴なんているのカ？」

「それも解決している。レベッカーの奴死ぬ間際にＳ級犯罪者『π』っていった。あの円術士πだ。奴なら可能だろう。なにせ『箱舟事件』の張本人だ」

「『箱舟事件』ってなんダ？」

「…おいおい、一応あなた帝国軍なんだからそれぐらい知っておきなさいよ」

バインは呆れた顔つきで話し始めた。

「『箱舟事件』ってのは１０年ぐらい前にデーバっていう『神の国』を造ろうっていう教祖と当時マルスオフ対策として省力化、効率的な魔法陣を開発して有名だった円術士が起こした事件だよ。ある国の王様がエコーズ対策として有名な円術士に魔法陣作成を依頼してきた。その円術士はデーバとともに王の指示通り魔法陣を国全体に施した。ところがこの魔法陣、実はエコーズの防御防壁の役割を果たすものではなく、箱舟と呼ばれた宗教団体を空へと飛ばすために造られたものだった。そのためにデーバ率いる狂信者に王は殺され、国民は魔法陣のための生贄とされ、国ごと空かなたへと舞い上がったっていう話だ。その国は帝国の加盟国だったため、デーバはＡ級犯罪者として認定、円術士…確か本名はダークドラゴンと言ったか、人の名前は削除され罪名としてＳ級犯罪者『π』という名がついたというわけだ」

「ダークドラゴン」という名前にエリカが少し反応した。だが、バインとアナは気づかなかった。
「今でもその国があった所は地面に巨大な陥没ができてるはずだ」
「その後どうなったんダ？」
アナの問いにバインは両手を上げた。
「何も。国は空高く舞い上がったまま落下もしてこなかった。『四天』の能力者でも探し出せないだろうさ」
「…その円術士がこの国にやってきた…」
エリカの様子が少しおかしい。ようやくバインとアナが気づき始めた。
「そうだな。理由はわからないがすでに地上へと降りてきているらしい」
「…彼をどうするつもりですか？」
「捕らえるサ。犯罪者として認定されているのならナ」
「…そうです…よね」
「どうしタ？　なんかソワソワしているゾ？」
アナがエリカの顔を覗き込む。
「えっ！？　あっ、そっそうですか？　すみません。そんな凶悪な人があの城にいるとは知らなかったから…」
「あのレベッカーが来たのはいつぐらいからだった？」
「…確か…半年前ぐらいだと思います」
「依頼日時と一致するな。これは間違いないだろう」
バインは立ち上がった。そして光の柱の方を向いた。
「…お姉さん。この魔術はおそらく何日と持たない。ここまで巨大なんだ。おそらく3日後には終わるだろう」
「…なにがいいたイ？」
「ここで待機しよう。S級犯罪者とは『人の名を持てぬ者』。俺達のように『赤眼化』できるし能力も未知数だ。正面から戦うのは賢いとは思えない。ここは援軍を呼びに行こう」
バインが言う事ももっともだった。S級犯罪者とはA級犯罪者の

ように経歴や個人情報がわかっておらず、『赤眼化』できるうえに国や町、村1つ滅ぼす事が可能とされた者のことだ。特に最悪とされたS級犯罪者には『ゴキブリ』『イナゴ』『シデムシ』の3人がいる。
「だけどその頃にはもう何もかも終わっているんじゃないカ？」
「…まあ…そうかもしれないけど…」
「バイン。確かにまだ相手の出方もまったくわかっていないけれどもこれだけの事をする奴ダ。きっととんでもない事をしでかすに違いなイ。終わってからでは遅いと思ウ」
「…しかし…」
「大丈夫ダ」
アナは立ち上がると真っ直ぐバインを見た。
「私達は犯罪者から『死帝』と恐れられる存在だゾ。何もかも終わってからじゃ誰もその実力を認めてくれなイ。犯罪を未然に防いでこそその名で呼ばれるのにふさわしイ」
部族としての誇りだろうか。アナは正論をバインにぶつけた。
「…はあ。わかったよ。まあS級犯罪者なんて倒したと上がわかったらランクが上がるかもしれないしな。それに賞金額も高い。これはチャンスといえばチャンスだ」
バインは奮い立たすために自分に言い聞かせた。
「ちなみにお姉さんはS級犯罪者と戦った経験は？」
「なイ」
「…あっ、なんか頭が痛い」
「どのあたりダ？　撫でてやル」
「あっ！？　やめろっ！？　それをするととんでもないことが起きるぞ！」
バインはズサッと後ずさった。アナはニヤニヤ笑っている。コモリとエリカは何のことだかわからない。
「…とにかく今から俺達はお城に行ってくるから、お前達二人はここにいるんだ」

「…わかりました」
エリカは少し間をおいてコクリと頷いた。
「バイン。今大変なことに気づいタ」
「なに？　お姉さん」
「腹が減っタ」
「実は俺もだ」
２人のお腹が同時に鳴った。その時、別の方向からお腹が鳴る音が聞こえた。
「朝から何も食ってないからな。干し肉も食べちゃったし」
「まったくダ」
「ほんとにそうだ」
「ほんとに…あれ？」
バインは１人多いことに気づいた。アナの隣に誰かいる。服装は違うがどこかアナにそっくりだ。
「おかしい。腹が減りすぎて糖分が脳にいってないのだろうか？　アナが２人に見える。もう１人は生き別れた兄弟？」
「私には兄弟はいないゾ」
「俺には兄弟はいるゼ」
アナと同時にもう１人のアナもしゃべり始めた。
「あれ？　なにこれ？　もしかして今までの出来事は夢オチ？　起きたら隣に白衣を来たえらそうな医者が『大丈夫ですかな？　バインさん』とかいうパターンか？」
「こら！　勝手に出て行くな！」
森の中からやけに気の強そうな女の子が出てきて、もう１人のアナの腕を引っ張った。
「ごめんなさい…じゃ！」
その女の子は素早く逃げようとする。
「「待て」」

アナとバインは即効で呼び止めた。
「誰だお前等？」
「わっ、私達は別に地上に降りてきただけで…その…みんな出てきなさい！」
言葉に困った女の子は森に向かって叫んだ。すると、困ったように苦笑する女の子とその子の後ろに眼鏡をかけた女の子が出てきた。なによりも４人とも背中に何か翼のようなものをつけている。
「スワロー…ひどい」
「誰がよ！」
「もしかしてお前等天使カ？」
翼に着目したアナが話しかけた。
「…はい…そうです」
苦笑しながら森からでてきた女の子がそう答えた。
「オオオオオ！！　バイン！！　天使ダ！！　やっぱり天使はいたんダ！！　私の言うとおりだロ！！」
アナが興奮してバインの服を引っ張った。
「ばっ…馬鹿な…天使が存在するわけ…」
「ホラ見ロ！」
アナはスワンの翼を触った。
「きゃ！？」
スワンは驚いて飛び退いた。
「本物の翼ダ！　この世に天使はいたんダ！」
信じられないといった顔でバインは天使達を見回した。
（なっ…なんてこった…天使がいるということは神様もいるということで…これは…これは…）
バインの目が怪しく光った。

（俺の悲願、男の宿命、この逃れられない運命（ハゲを直してもらうこと）に逆らうことができるかもしれない。『現実と戦わなきゃ！』という悪魔の囁きを打ち砕くことができるのだ）（↑どっかの

帝王口調）

と、本気でバインは思った。

―ただ、エリカとコモリだけは彼女達に近づこうとはしなかった…。

地上人と出会って

薄暗い玉座にπはひっそりと座っていた。閉じていた両目をゆっくりと開き、薄暗い部屋を見回す。
「…4人か…ふふ、ミカエルの奴。慎重だな…」
πは口元を歪め1人笑う。
『―あと1人いれば術は完成する。連れてくるかい―』
天井から声がした。πは慌てることも動じることもなく、静かに言った。
「うん連れてきて。余計なものも何人かいるみたいだけどね」
『―クロトカゲがウロチョロしてるみたいだけどねぇ―』
「ほっとけばいいさ。まだレベッカーの奴が死んだことに気づいてないみたいだしね。それよりえらく興奮しているじゃないか。何かあったのかい？　チェシャ」
『―懐かしい知人と会ったのさ―』
天井から気配が消えた。
恐ろしいほどの静寂がやってくる。
「…エリカ…もうすぐ物語は終わるからね…」
πはそう1人静かに呟くと再び目を閉じた。

「それで？　神様ってのはいるの？」
「はっ、はい…います…」
「その神様は人の小さな願いを叶えてくれるの？」
「はっ、はい…善行を行えば…」
スワンはバインに問い詰められるように質問に答えていく。まるで警察に尋問されている犯人のようだ。
「そうか。神はいるのか…」
バインは何かを思い起こすように顔を上げた。

「お姉さん」
「なんダ？」
「俺は今日からゴッド・バインと名乗る」
「…マジでカ？」
その気持ちの悪いネーミングにさすがのアナも驚きを隠せなかった。バインは両手を合わせると何かを唱え始めた。…どうやらお経らしい。
「そんなことよりもお前達の国は平和なのカ？」
「はい。平和です。争いも犯罪もありません」
「本当カ！　なあ、どうしたらその国にいけル？」
「…あの…行きたいんですか？」
「うン。私はその国に住んで結婚していっぱい子供を生んで暮らすんダ！」
「…その…無理だと思います」
「えっ！？　なんデ！？」
「神の使いである証の翼がないから…」
「うっ、うっ、嘘ダ！！」
アナはショックでのけぞった。その勢いで地面に頭を打った。よほどショックだったらしい。
「お姉さん。元気だしなよ。神がいるというだけでもうけもんじゃないか」
バインはお経（？）を唱え終えると清々しい顔でアナに言った。その悟りを開いたような表情にアナは多少むかついた。
「ところで名前の確認だが君がスワンという天使様だね」
「はっ、はい」
バインの声が優しさに満ちている。あまりもの変わりようにスワンはのどがつかえた。
「そこの眼鏡っ娘がセガルちゃんだね」
「あの…そうです…」
セガルはその声に何故かおびえている。

「そしてその色黒い男の子のような天使様がダーク君」
「そうで～す」
ダークは気にもならず手をあげた。その能天気さが羨ましいとセガルは思った。
「それからその美しい髪、毛並みの整った翼、貴族もびっくりするような整った顔…」
スワローは自分の事だと思い「ふふん」と自慢の髪をかきあげた。
「君の名前はロリータだね」
ズコッ！
予想外の事にスワローはついズッコケた。
「なんでよ！　私はスワロー！」
「もうロリータでいいじゃないか。君はとってもロリータだよ」
バインは悪意もなく爽やかな表情で言う。
「何よそのロリータってのは！　意味不明よ！」
スワローはブリブリ怒り始めた。
「なあ？　ロリータってなんだ？　よくコンビニとかでレジ打ってる人のことか？」
「違うぞ。ロリータとはね…」
「んなことどうでもいいわよ！　私はスワロー！　ス・ワ・ロー！」
ダークの問いに答えようとするバインに対してスワローは必死で名前を連呼した。
「俺の名前はバインだ。今日からゴッド・バインと呼んでくれ。そしてこのショックを受けてイジケてる女がアナだ」
「私と同じぐらいの背丈ですね。おいくつですか？」
「…お前達の年齢を2倍した年ダ…」
「嘘だぁ」と悪意なく笑うスワンに対してバインはさりげなく頷いた。それはアナに同情しているつもりなのである。
「そいでそこの少女2人がエリカとコモリだ。金髪の少女がエリカで、黒髪の少女がコモリ…ってどうした？」
エリカとコモリは天使達から離れた位置にいた。コモリに至って

は怯えているのかエリカの背中から出てこない。
「あのっ、その人達は天使ですよ？」
　エリカの声が震えている。訳がわからないバインとアナは顔を見合わせた。
「そうだぞ？　見てのとおりだ？」
「どうしタ？　天使が怖いのカ？」
「国民を虐殺した…凶暴なあの天使…」
　エリカは小さく呟いたため、バインとアナはよく聞こえなかった。
　スワンは立ち上がるとエリカ達に近づいていった。エリカは「ひっ！」と小さく悲鳴を上げたまま体を硬直させた。スワンはエリカの所まで来ると顔をジッと見つめた。
「なん…ですか？」
「…ふ～ん」
「？？」
「なんかスワローと同じ匂いがする。良い香り。それに言葉遣いも丁寧だし。ねえ。あなた貴族？」
「……違います」
「そうなんだ。地上人って翼がないだけで私達となんにも変わらないんだね」
「……」
「ねえ。手をつなごうよ」
「……どうしてです？」
「なんとなく。さあ」
　スワンは手を差し出した。エリカはその行為を見てどうしようか迷っている。その間にスワンの手が伸びていき、エリカの手を握った。
「なっ！　…」
「暖かい。小さくて細い指。やっぱり私達と何も変わらないね」
「……」
「神様に感謝しなきゃ。今日の出会いに感謝」

スワンはエリカの手を握ったまま額まで持っていった。
「—あなたに出会って良かった。ありがとう」
「……プッ、変な天使様」
エリカの表情がようやく崩れた。安心したのだろう。それともスワンの性格がそうさせたのかもしれない。
「私達お友達になれるよね？」
「…さあ、それはわかりません。まだあなたのこと知らないですし」
「なれるよ。こうやって会話も出来るんだもん」
「…やっぱり変な天使様」
エリカは安心したように「ほっ」と息をした。
「その子は？」
「ああ、この子はコモリちゃんです」
エリカは後ろに隠れているコモリを紹介する。小さな女の子だなとスワンは思った。
「こんにちは。コモリちゃん」
「…やだ」
コモリは後ろに後ずさった。表情は恐怖で固まっている。エリカ以上にひどい反応だ。
「大丈夫ですよ。…この人達はあの天使達じゃありませんから」
「やだ…やだ…頭痛い…来ないで…」
エリカが小さく囁いたが、コモリはさらに後ずさる。よほど天使が怖いのか目から涙が流れている。さすがのスワンも近づけない。
「コモリちゃん…」
「ったくどうしたってんだよ。俺達が何かしたか？」
我慢できずダークがズンズンとコモリに近づいていった。
「わっ！　馬鹿！」
スワローが慌てて止めようとしたが遅かった。
「キャー！！！！」
すごい悲鳴を出した後、コモリは森を飛び出し、光の柱が走っている危険地帯に行こうとしている。

「まずい！　お姉さん！」
「わかってル！　―エンプネスの名において命じる。小さく跳ねまわる者に静かなる重みを―」
アナが得意とする術をコモリにかけた。
エンプネスとは『１３人の赤眼の者』の１人で重力を操ることができたと言われている。その姿は１３人の中でも巨大だったらしい。
ドスッ！
コモリが地面に膝をついた。バインが慌ててコモリを抱き上げる。
「おわっ！？　おもっ！？　お姉さんもういいって！」
「わかってるヨ！　私は術のコントロールが苦手なんダ」
一桁詠唱ですら短縮して術を発動させることができるアナの欠点は、発動言語が短いことによって目標がうまく定まらないことだった。
アナは「スウー」と息を吸い込み術を解いていく。
「…やれやれ」
バインがコモリの様子を見ると、目を閉じたまま動かない。どうやら気絶しているようだ。
「この馬鹿！」
「いて！　なんだよ…」
スワローはダークをはたいた。ダークも悪いと思っているのか頭をさすったまま文句も言わない。
「なんで俺達を見て悲鳴を上げるんだよ…」
「なんか嫌な思い出でもあったんだろ。うん？」
「どうしタ？」
「お姉さん。これ見てくれ」
「うン？　…なんか変な跡があるナ？」
バインがたまたまコモリの服がはだけた背中を見てアナに見せた。背中には２つの跡があった。肩甲骨の部分に左右細長くついている。
「なんだロ？」
「うん…肌が再生を始めているな。なにかひどい怪我でもしたのか

…」
バインは丁寧にコモリを安全地帯の地面へと寝かせた。
「とにかく。腹が減ったら誰でもイライラするサ。バイン。飯を探しに行こウ」
「そうだね。お姉さん。とりあえずコモリはエリカに任せようか」
エリカはコクリと頷いた。
「これから長期戦になるからな。あと聞きたいんだけど君達は何しに地上に降りてきたの？」
バインは聞き忘れたことを天使達に聞いてみた。
「あっ、私達はその…急に爆発音が聞こえて…それで…ええと…地上に何が起きているのか知りたくて…」
「そうか。πの攻撃をくらったわけか…君達の国は空の上にあるのか？」
「そっ、そうです」
「そうか。じゃ、お姉さん行くか」
バインとアナは森の中に入っていった。エリカはコモリの傍に腰をおろすと優しく髪を撫でてやった。
「…ごめんさない。私達のせいで」
スワンはエリカに謝った。エリカは「ううん」と首を横に振った。

バインとアナは2人きりになり森を探索し始めた。しばらく歩くとバインがアナに話しかけた。
「…お姉さん。もしかしてあの天使は『デーバの子孫』じゃないかね」
「『デーバの子孫』？」
「ああ。第一級危険物に認定されている。俺も初めて見るけどね。そしてπが攻撃した国ってのがもしかするとデーバが造った国なのかもしれない」
「…空の上に舞い上がったっていう…あの国カ？」

「うん。まだ推測でしかないんだけどね」
「でもそれはおかしイ。どうしてπは自分のいる国を攻撃するんダ？」
「そこだよねぇ。…これはもしかするととんでもないことに巻き込まれているんじゃないかな」
「もう巻き込まれてるサ」
アナは森をキョロキョロと見回した。誰もいないことを確認しているのだ。頬が仄かに赤らんでいる。
「…休むかい？」
バインはいつものことなので落ち着いている。
「…うン。ここでいいだろウ」
アナの声が変わった。いつもの野太い声からか細く、弱々しくなった。
アナは腰のバックから毛布を取り出す。
「…傍にいてくれるカ？」
「…もちろんだ」
大事にしている赤いハチマキをスルリとといて、アナはバインと向き合った―。

猫と骸骨

「…遅いわね」
スワローはイライラと地上を見下ろした。まだバインとアナが戻ってこない。食料調達にこんなに時間がかかるものだろうか。
エリカはコモリの傍にずっといる。コモリは気絶したままだ。この2人は私達を最初に見て怯えていた。どうしてだろう？
ダークはさっきのことで不貞腐れて寝ているし、スワンとセガルは初めて見る地上に感動してはしゃぎ回っている。…というか、別に私達がいた世界とあまり変わらないじゃない。
「あ～…つまんない」
スワローは立ち上がると、2人が何をしているのか見に行こうと森へと歩いていく。
「あっ、スワロー？　どこ行くの？」
「ちょっと散歩。すぐ帰ってくるから」
スワンに本当のこと言うと「私も行く」とか言ってついて来られかねない。
「気をつけてね」
「は～い」
セガルに適当に返事をすると森の中に入った。
森は静かでシットリとしている。別に私達の国にある森と変わらない。可愛い動物とかいないだろうか。そんな動物がいれば持ってかえってペットにしよう。
そんなことを思いながらスワローはズンズン森の中へ入っていく。
葉と葉の間から差し込む太陽。仄かに香る花の匂い。でも不思議なことに動物や鳥の鳴き声が聞こえない。
「…なんか変な森」
違和感を感じながらも先へと進んでいく。
「…ん？」

人の声がした。あの2人だろうか。
スワローは驚かしてやろうと思い静かに声がする方へと進んでいく。しばらく進むと人の気配が濃くなってきた。
（…あっ、いたいた…）
そっと近づいていく。視界の中に樹にもたれかかっている人物が見える。あの背丈からして小さいアナのほうだろう。木々の間から差し込まれる光のおかげでよく見える。
「…？」
足が止まる。アナは毛布に包まれて座っている。裸なのだろうか？　素足が毛布から見える。それに毛布の間から以外に豊満な胸の谷間も見えた。
―ゴクリ。
唾を飲み込んだ。
毛布の影に隠れて表情は見えないがジッと座ったまま動こうとしない。何かを話しているみたいだが小さくてよく聞こえない。規則的な息づかいだけはなんとかわかる。
（…何をしてるの？）
好奇心が強くなったスワローはギリギリまで近づいていった。すると毛布からアナの手が出ていた。その手を握っている人物がいる。ちょうど木の陰でよく見えないがあのバインなのだろうか？
（？？）
まったく意味がわからず、その場に立ち止まり様子を見る。2人で手を握り締めて何をしているのだろうか？　その行為は何を意味しているのだろうか？　私達の国ではよくわからない行為だ。
（…男と女が2人ですることといったら…）
スワローは考えてみたが何も思いつかない。それで声をかけてみようと思ったがそんな雰囲気でもない。結局声をかけないままスワローはその場を離れた。
2人から離れ、だいぶ歩いたところでようやく落ち着いてきた。何故か心臓がドキドキと鼓動をたてている。淫猥な気持ちになる自

分が少しだけ嫌になる。
「…変なの。地上人てよくわからないわ」
スワローはそれで自分を納得させようとした。体の芯から興奮している自分を抑えようとした。それでもあの光景が目に焼きついて離れない。
「…ああっ！　もう！」

『―おやおや。どうしたんだい？―』

「！？」
突然頭の上から声がした。見上げると何もない空間に口のようなものが見えた。
「…誰？」
『―僕はチェシャだ―』
口のようなものが徐々に裂けていく。そして牙のようなものが見え出す。
「なに…何者なの？」
『―ただの気まぐれな動物さ―』
声の主はのんびりと言った。空間から黒いローブが見え始めた。それが口元を覆っていく。
「そこで何をしているの？」
『―君こそ何をしているんだい？―』
完全に姿を現したチェシャは黒いローブで全身を包んでいた。唯一見えるのは耳まで裂けた口だけだ。その口は不気味にニヤリと笑っている。
「なによ？　なにが可笑しいの？」
スワローは少しイラついていた。さっきみた男女の情事を覗き見していたことがバレたのではないかという根拠のない思いが頭に持ち上がったからだ。
『別に可笑しくはないよ』

「じゃあ何故笑っているの？」
『それは君が怖くないようにするためさ』
平然とチェシャは言う。
「…そう。それならいいわ」
スワローは特にチェシャに対して怖いという感情は持たなかった。むしろ恐ろしい者に触れてみたいという若者特有の好奇心から近づいてみたいとも思っていた。
『―ここにおいてでよ。シロウサギを追いかけてきた僕らのアリス―』
チェシャのローブがスッと動く。少しずつだがスワローに近づいていく。スワローの羽が緊張で大きく広がる。
「…あなたと一緒に…どこに行くの？」
チェシャが眼前まで迫っている。それなのに体が逃げようとしない。何故か身を委ねようとしている。
『―『真実』の所さ』
チェシャの背中から何かが出てきた。それは左右に広がると大きな翼に姿をかえた。黒い翼だった。
スワローの目が大きく見開いた―。

「大丈夫ダ…大丈夫ダ…」
今日は長いなとバインは思った。アナはバインの手を握ったままそんな言葉を何度も呟いている。戦闘服である民族衣装を脱ぎ、武器を置き、大事なハチマキを空いている手で握り締め、念仏のように言い続けているのだ。
服を脱ぐと戦いから解放されているようで気分が良いらしい。すっぽりと頭から毛布をかぶり、自分を鼓舞するように独り言を呟く。アナは何か大きな戦いの前や、戦いが終わった後はいつもこうしている。
あのS級犯罪者と戦うんだ…無理もないか…。

バインは細い目で森の奥深くを見つめている。視界にはアナは入っていない。引きこもり状態のアナを見るのが悪い気がして見れないのだ。
アナが引きこもっている間、バインはふと昔の事を思い出す。アナと初めて会った時のことを。
―お姉さんと初めて旅した頃は驚いたな。村人から倒してくれといわれているマルスオフと戦う前日、宿屋で一日中引きこもって出てこなかった。当時は俺も知らなくて、心配して部屋のドアを蹴り破って入ったもんだ。
中でお姉さんはベッドの毛布で体を包んだまま動いていなかった。どうしたのかと声をかけると泣きながら謝ってきた。『戦うのが怖イ』と…。
その時初めて気づいた。お姉さんはかなりの使い手だ。なのにどうしてランクが４９位なのかを。
色々お姉さんと話した。初めて出会った時に言っていた言葉の真意もわかった。お姉さんは戦う事にむいていない。
だけど周りが許さないだろう。部族として戦闘経験があり、『赤眼化』もできる。なによりも…あの強さだ。本人が嫌がっても運命に飲み込まれていくだろう。
運命という巨大な歯車に―誰も逆らうことなんてできやしない…。
バインの額がピキッと痛くなる。
お姉さんといる限り…俺のランクも上がらないな…だけどそれは…くそっ…またいつもの頭痛が…あいつ等がやってくる…。
「…バイン…バイン…」
お姉さんが俺の名前を呼んでる。ほんとに普段では信じられないぐらい弱々しい声だ。これがあの死帝アナとは思えない。
「…なんだい…お姉さん？」
「…私はまた余計なことを言ってしまっタ。あの子達に『大丈夫ダ』なんて事を言ってしまっタ。それに本当は臆病なくせに城へ行こうだなんて強がった事を言ってしまっタ」

これもいつものことだ。自分の言った事に自信が持てないのだ。
バインはチラリとアナを見た。木々の間から差し込まれるキラキラと光る光線のおかげで、アナの茶褐色の肌がよく見える。それがとても眩しくてすぐに目を逸らす。
「…余計なことじゃないと思うよ。…俺にはとてもじゃないけど言えないことだ」
「仕事上そう言っただけダ。本音は違ウ。―私はいかなる道徳にも正解はないことを知っているカラ―」
若さとは理想主義だ。いかなる妥協も許さず、道徳に厳格だ。だけど大陸を旅し、様々な人種、多様な民族に出会ううちに自分のもつ道徳は絶対じゃないこと思い知らされる。道徳に迷い、絶対の自信が失せるからこそ寛容さが生まれる。
わかるよアナ。俺も自分自身が英雄ではないことを知っている。この世に正しいことなど何もない―。
「…そうだな…わかるよお姉さん」
カタカタ…カタカタ…
あいつ等が叫んでやがる…。
森の奥深く、暗い、暗い、闇から薄っすらと現れる人ならざる者。白くて、人間のように2本足で立っていて、自分と同じ武器をもっている…10人の髑髏の兵士。森の暗闇からカタカタと音をたてバインに近づこうとしている。
だけどあいつらは俺の元にはこれない。なぜなら、俺とあいつらの間には見えない強固な境界線があるからだ。あいつらはそれを破ることができない。
カタカタ…カタカタ…
髑髏達の口が開く。

『―バイン―』
『―バイン―』
『―バイン―』

『―下っ端のバイン―』
『―パシリのバイン―』
『―足手まといのバイン―』

髑髏が笑う。そして罵ってくる。

『―裏切り者バイン―』
『―よくも我等を―』
『―共に戦ってきた仲間を―』

『―殺したな―』

１０人の髑髏は横ならびになるとそれぞれが汚い言葉を吐き始める。それは憎悪、それは悪意、それは嘲り…。その言葉を聞いていると頭痛がさらに酷くなる。

『―お前に安楽な死を―』
『―お前に安らかな死を―』
『―お前に平穏な死を―』
『―お前に愛する者に見守られる死を―』

髑髏達が大きな口を開けた。その白い口の奥は空洞だった。大きな闇が広がっている。

『―与えられると思うなよ―』

「バイン…」
髑髏達が突然消えた。頬から汗が流れている。アナの声で我に返れたようだ。
「―お前がいつも私の傍にいてくれるから助かるヨ。ありがとウ。バイン―」
「…そんなことないよ」
バインは肩の力を抜くと目を閉じた。
「―死はいつも突然だ。俺はお姉さんがいてくれて助かってる。…無茶なことを言うのなら…死なないでくれよお姉さん―」
「…お前がそう言うのなら、なんとかがんばってみるヨ」
アナは嬉しそうに笑うとバインの手を握り締めた。バインもそれに答えるようにアナの手をしっかりと握り返した―。

「…遅いねぇ。バインさんにアナさん。それにロリータ」
「スワン…本人に聞かれたら怒られるよ」
セガルとスワンはバイン達を素直に待っていた。待つ間光の柱や地上の草木についてセガルと話し合っていたスワンも次第に飽きてきた。どう見ても天上界と似たりよったりなのだ。
それより早くここから移動してもっと世界を見てみたかった。物語でしか読んだことのないような怪物や幻想的な風景、それに色々な地上人にも会ってみたかった。なによりもせっかくのチャンスだ。せっかくあの難そうなミカエル様から地上へと降りる許可をもらったのだ。もっと地上世界を満喫したい。
「…うっ…ん」
コモリが小さな声を上げた。
「あっ！　気がついた！」
「そうみたいですね」
気品ある口調でエリカがコモリの額を撫でた。優しい子だなとスワンは思った。まあ天上界では当たり前である。

コモリはゆっくりと目を開けた。少しづつ光が視界を照らしていく。丸い瞳を大きく開けると、そこには手で変な顔をつくったスワンがいた。
「……」
セガルはスワンの後ろで笑いを我慢している。ダークは完全に寝ているのか寝息が聞こえる。
「バア～」
「……」
コモリはしばらく呆然とスワンの変な顔を眺めていた。やがてゆっくりと口元が歪み、笑顔になる。
「ふふっ、おもしろかっ…ぶっ！」
「バチッ！」とコモリの両手がスワンの左右の頬を挟んだ。
「いっ、痛い！」
「…ううっ～」
痛みでひるんだスワンを見計らい、素早くコモリはエリカの背中へと隠れた。そして犬のようにスワンに向かって唸った。
「あらら」
エリカは悪いと思ったのか一生懸命笑いをこらえている。
「痛い！　もう！　お母さんにもぶたれたことないのに！」
「まあまあ、子供のやることですから」
「…とかいいながらエリカ口元が歪んでる…」
「そうですか。それは失礼」
エリカは流暢に受け流した。
「あはは！　スワン！　赤い跡ついてる！」
「えっ！？　ほんとっ！？　…というかセガル笑いすぎ！」
「だって！　はは！」
スワンはセガルにプリプリと文句を言おうとした時、視界が一瞬ぶれた。
「「えっ！？」」
スワンとセガル同時に起こったらしい。

「キャー！！！！」

「なに！？」

「スワロー！？」

スワンとセガルは森から聞こえた悲鳴に声を上げた。

「なっ、なんだ！？」

さすがのダークも飛び起きた。

「もしかして…スワローに何かあったんじゃ…」

セガルはオロオロとし始めた。

「スワン」

エリカに初めて名前を呼ばれてスワンは振り向いた。

「行きましょう」

エリカの顔は真剣だった。それは何かよくない事が起こる前触れのような感じだった。

「…うん！」

５人は悲鳴の元へと駆け出した―。

トカゲと湖

アナとバインはとりあえず適当に山菜を摘んでいた。本当は動物性タンパク質や脂肪があったほうが運動にはいいのだが、いくら探しても動物が見つからない。そこで仕方なく木の根にはえてるキノコやお茶にできそうな葉を摘んでいる。

「バイン。すごいゾ。大きなキノコ見つけタ！」

アナは樹に登っているバインに向かって、紫色の怪しい胞子を漂わせているキノコを見せた。

「…お姉さんそれは毒キノコだよ。どうみても毒々しいだろ」

「ふウ。贅沢だナ。私が飢えで苦しんでいる時はこんなキノコでも…」

「いいって、お姉さんの餓死寸前記憶なんて聞きたくないから。それにお姉さんと違うあの子達が食ったら確実に死ぬだろ」

バインは適当にお茶にできそうな葉を摘んでいる。

「この葉はお湯でふやせば食えるかね。…にしても虫もおらんな…せっかくのタンパク質が…」

「バイン。見ロ。これはおいしそうなキノコだゾ」

アナが今度は茶色いキノコをバインに見せた。

「おおっ！　ナイスだお姉さん！　それはかの有名な松…」

「キャー！！！！！」

突然つんざくような悲鳴が森に響き渡った。

「なっ、なんだ！？」

「この声…スワローだ！」

声でアナは誰の悲鳴かわかった。すぐに武器を背中に乗せた。

「バイン！　行くぞ！」

「待て！」

森の奥へ行こうとするアナをバインは呼び止めた。
「…樹から降りる時は慎重に降りないとね…」
バインは何故か髪を押さえながら一歩一歩樹から降りている。
「バイン…かっこ悪いゾ！」

「はあっ…はあっ…」
スワン、セガル、ダーク、エリカ、コモリの5人は悲鳴がした場所へと向かっている。森は縄のような枝やひょうたんのような実、人が両手を広げているような枯れ木などが障害となり、なかなか前へと進めない。
スワンとセガルとダークはエリカやコモリと違って翼があるので余計に進みずらくなっている。
「いっ、痛い！」
セガルの翼に木の枝が刺さった。すぐにセガルはその枝を取り除く。
「大丈夫？」
「う…ん。ごめん」
心配そうなスワンにあいまいな笑いでセガルは応えた。
「あっ！　見ろ！」
ダークが急に立ち止まり空を指差した。すると、空にはスワローがいた。そのスワローを抱えて大きな翼をもつ何者かが空を飛行している。
スワローはダラリと両腕をたらしたまま動かない。もしかすると気絶しているのかもしれない。
スワローを抱えている者は黒いローブをヒラヒラさせている。まるで空を歩いているかのようにスウーと先へと進んでいく。
「くそっ！　待て！」
ダークは翼を広げると相手を捕まえようと空に羽ばたいた。黒いローブの人物が私達に気づいた。それはニヤリと大きな口で笑うと

スピードをあげた。
「待ってください！　この先は摩周湖です！　先に進むのは危険です！」
　エリカはダークを止めようとしたが、ダークは空に飛び出してしまった。仕方なくエリカはスワン達だけでもその場に留めた。
「どうしたの！　スワローとダークが行っちゃう！」
「わかってます！　この先は摩周湖といって年中霧が出ていて危険なんです！」
「じゃあどうすればいいの！」
　スワンはエリカに向かって叫んだ。
「…私を連れて行ってください」
「えっ？」
「コモリとセガルはここで待機して、私達が戻ってこなかったら帝軍の人達を探してください」
「えっ？　そんな…」
　セガルは自信なさそうに答えた。
「きっとあれはπに関わりのある者に違いありません。迷っている暇はないのです。スワン、一緒に行きましょう」
「いっ、いいけど…どうやって…」
「私を運ぶことはできますか？」
　エリカは真顔でスワンに聞いてくる。
「運ぶ？　エリカを？　…できないことはないと思うけど…」
「それなら運んでいってください。この先は大きな湖になっています。素人が勝手に入ると抜け出せなくなります」
「…わかった。セガル、コモリをお願い」
「ええっ！？」
　セガルはスワンからも期待をよせられてオドオドとし始めた。セガルの性格上難しいと思うが、仕方がないとスワンは思った。
「…コモリ、このお姉ちゃんと一緒にいてください」
「…やだ。…エリカといる」

コモリは明らかな拒絶反応としてエリカの服を引っ張った。エリカは困ったようにコモリを見た。
「…私はすぐに帰ってきます。それにこの人達は『あの天使』達じゃありません。…だから心配しないで…」
「…絶対帰ってきてくれる？」
「約束します。そうだ。指きりしましょう」
エリカは小指をコモリに差し出した。コモリはどうすればいいかわからないようだ。エリカは微笑むとコモリの小指をとり、お互いの指を結んだ。
「約束の証です。私は必ず帰ってきます」
「…うん」
コモリはその指を見てニコリと笑った。可愛らしい笑顔だとエリカは思った。
「それじゃ行きましょう。スワン」
「わかった」
スワンはエリカを抱きかかえると空へと羽ばたいた。エリカの体重は軽いので落とす心配はないが、やはり高度が低くなってしまう。
「スワン！　気をつけて！」
セガルはスワンに向かって必死で手を振った。いつしか2人は見えなくなり、森の奥へと消えていく。
「…行っちゃった」
残されたのはセガルとコモリだけだ。コモリはエリカの言いつけを素直に守り、地面に腰をおろした。セガルも今後のことを考えようとコモリと離れて岩の上に座ろうとした。
ガサッ…
「ひっ！」
遠くで草が動く音がした。コモリはすぐに立ち上がると遠くを見つめる。セガルもすぐにコモリの元へと走った。
「だっ、大丈夫。気のせいよ」
セガルはコモリを落ち着かせようと言ったが、自分自身がなによ

りも落ち着いていない。逆にコモリの方が心配そうにセガルを見る。
「くっ、草なんて四六時中動いてるし…大丈夫だよ…もし何かあったらお姉ちゃんが護ってあげるから…」
ガサッ…ガサッ…
「ひっ、ひい！」
セガルは小さく悲鳴を上げた。確実に誰かがこちらに近づいてきている。気配がするのだ。
「だだだだ大丈夫よコモリちゃん。おおおお姉ちゃんが護ってあげるから」
「…セガル…震えてる…」
「ちちちち違うよ。わわわわ私じゃないよ。ここっ、コモリちゃんじゃないの？」
明らかにセガルの方が震えていた。コモリはセガルに気を使って離れようとするのだが、セガルの方がコモリの体にしがみついているので離れられないでいる。
ガサッ…ガサッ…ガサッ…
「てっ！　帝国軍の人ですか！　バインさん！　アナさん！」
たまらずセガルは叫んでいた。
ガサッ…ガサッ…ガサッ…
返事がない。それに一定の間隔を置いて確実にここに近づいてきている。
「ちっ！　違うんですか！　返事をしてください！」
ガサッ…ガサッ…ガサッ…
やはり返事がない。音がさらに大きくなる。
セガルは軽いパニックを起こした。こんな状況を経験したことがないからだ。それに行動的なスワンやスワローやダークがいないのでどう動いたらいいのかわからない。
「セガル、逃げよう」
コモリがセガルを見上げて言った。
「そっ、そうだわ。私には翼があるんだし。コモリちゃんぐらい背

負えるはず」
セガルは翼を広げようとしたが、震えが邪魔してうまくいかない。
「こんな時に…どうしてよ…」
「セガル、落ちついて」
「わっ、わかってる！」
コモリにまで同情されセガルは自分が情けなくなった。どうしてこんな時にうまくいかないんだろう。こんなときに…！
ガサッ！
大きな音がして人影が2人の前に姿を現した。
「ひっ！！」

「どうしたんだい！！　僕のロリータ！！！！」

草むらから出てきたのはバインだった。どうやら脅かそうと思ったらしい。実際驚いたのはセガルでそのまま地面に倒れてしまった。
「あれっ！？　ロリータじゃなかった？」
「バイン。いい加減名前で呼んでやレ」
呆れ顔のアナを余所目にバインはセガルの元へと近づいた。セガルは目を白くして地面に倒れている。どうやら驚きすぎて気を失ったらしい。コモリが指でツンツンしたが動かない。
「…返事がない。どうやらただの屍のようだ…」
「コモリ。どっからそれを覚えたんダ？」
バインは慌ててセガルを抱き起こした。
「どうした！？　俺のロリータはどうしたんだ！？　くそっ！　誰がこんな酷いことを…！！」
「お前のせいだヨ。バイン」
結局バインとアナは今の事情をコモリから聞くことになった―。

スワンとエリカは摩周湖の上を飛行していた。

湖から出る水蒸気が鼻や頬を潤していく。太陽に反射しキラキラと輝くその姿は光の粒の上を飛んでいるようだ。湿った風がサラサラと髪をゆらしてくる。
湖の底から黒い影が現れる。尾鰭がついているので魚だろう。天使の気配に気づいたのか再び底へと消えていく。
「なんか気持ちいい」
エリカを持っているので多少疲れるものの心地よさで気持ちがウキウキしてくる。
「そうですね。でもここから危険なんです」
金髪の髪をなびかせながらエリカがそう呟いた。
スワンは湖からエリカの顔を覗いてみた。エリカの眉はへの字になっていて綺麗に整っている。目元はきつめでどこか大人びた様子を醸しだしている。だけれども不細工というわけではなく、恐らく成長すれば美人になる可能性を秘めているかもしれない。
「…あの」
「うん？」
「天上の世界はどういった感じなのですか？」
エリカは視線を湖に落としたままスワンに聞いてきた。
「う～ん…とにかく平和で暇で退屈な世界かな？」
「…犯罪とか…戦争とかは起きないのですか？」
「起きないよ。だってみんな神の祝福を受けてるもの。そんなこと考えている人はいないよ」
「…そうなんですか…何か変な感じですね。私達人間からしてみれば…」
「人間はそういうことするの？」
「…ええ。人間には欲望がありますから。それに感情も」
「それなら捨てたらいいじゃん」
「…できませんよ。それが人間を構成している要素なのですから」
「ふ～ん。なんか複雑」
天使である自分とはやはり違うのだろう。地上人には地上人なり

の悩みがあるようだ。
「でも私達って翼があるだけで何も違わないよね？」
「そうですね。それは私も思います」
「私達の世界じゃね。あなたたちのことをコピーイングって呼ぶんだ」
「コピーイング？」
「うん、神の姿を模倣したって意味」
「へえ～不思議ですね」
「何が？」
「いえ、さっきスワンが言ったように私達は翼があるかないかの違いじゃないですか。それなのにどうしてコピーイングって区分するんだろうなって…」
「それは…えへへ、ごめんわかんない」
「あっ、いや。いいですよ。深い意味はないですから」
スワンは笑って誤魔化したが詳しくはまったくわからない。こういうのはスワローが得意としそうな分野だ。
「スワン…」
「うん？」
「私、あまり同世代のお友達が出来なかったんです。今あなたのような人と出会えてよかったと思ってます」
「私もだよ。でもエリカやっぱり変な言い方するんだね。肩こらない？」
「…結構こります」
エリカと私はクスクスと笑い合った。
今思えばエリカが自分を指名したのは信用の証かもしれない。初めてできた地上人との交友に心温まるものを感じた。
しばらく飛行していると霧が現れ始めた。最初は薄かったが徐々に濃くなっていき、視界が真っ白になっていく。これでは方向がわからない。
「ねえエリカ…」

「大丈夫です。このまま真っ直ぐ行ってください」
「うん」
ここから先はきっと危険地帯だ。スワンはエリカの指示通り動くことに決めた。
シャワシャワ…シャワシャワ…
「ねえ…何か変な声が聞こえるよ？」
「そろそろですね…」
エリカの顔が緊張で強張る。
異様な雰囲気にスワンの羽が縮こまった。ショッパイ水蒸気が口内に入り込んでくる。寒気が背筋からつま先まで走っていく。
シャワシャワ…シャワシャワ…
声が大きくなっていく。最初は小さくて聞こえなかったのが、言葉として耳に入り始める。
『おかあさんがわたしをころした。おとうさんがわたしをたべた』
『ないてないてなきつづけた。するとからいものがくちにはいっていしきがなくなった』
『だらしないせいかくだとおもう。はなれたくびがみあたらない』
「なに…これ…」
気味の悪い声がスワンの耳に入ってくる。
よく見ると、湖の上を黒い影が立っている。1人じゃない。何人も何人もの影が湖の上を立ち尽くしている。
「亡霊です」
「亡霊？」
「影の亡霊。人の死の瞬間が影となってこの広い湖に集まってくるのです。大丈夫。影は呟くだけで何もしません」
「そうなの…？」
「決して彼らと話してはいけませんよ。ついて来られますから」
「わっ、わかった」
『ひなたぼっこをしよう。じゅうじゅうやかれるけど』
『すいようびにけっこんした。もくようびにこどもがうまれた。き

んようびにぼうりょくをふるわれた。どようびにうごけなくなった。にちようびにうめられた』
『かわいいあかちゃんねんねしな。うさぎのかわにつつまれながら』
影の亡霊の言葉には悪意、憎悪、嫉妬…様々な負の言語が使われていた。何人もの言葉を聞いているうちに気分が悪くなる。
「なんか…やだ…」
「飛行に集中して彼らの声を聞かないようにしてください。大丈夫。私がいます」
エリカに勇気づけられながらスワンは飛行を続けた。そのおかげで霧が薄くなっていく。もうすぐこの霧から脱出できそうだ。
『しろいつばさがおりてきた。そしてわたしはひかりにつつまれた。するとせかいのなかにさわれないはねがまいおりた。とうめいのかいだんからおうどいろの―』
言葉が途切れた。霧を抜け出たのだ。
「…えっ？」
霧から脱出できたことでホッとしたスワンとは裏腹に、エリカが変な声をあげた。
「？　どうしたの？」
「うん…ええ…さっき変な言葉を聞いたなと思って…」
エリカは考え込んだが、スワンはそれを聞こうとはしなかった。もうあの奇怪な言葉を聞くのが嫌だったからだ。
「あっ！　地面が見える！」
「…摩周湖を渡りましたね」
スワンとエリカは湖の向こう側にたどり着いた。
「スワン。私を降ろして下さい」
「うん」
スワンはエリカを地面に降ろした。
「ここからが大変です。スワローさんとダークさんを助けるために

慎重に行動しなくてはなりません」
「どうするの？」
「恐らく、あの黒いローブの人物は方向からしてお城へ向かったと思います。でも摩周湖近辺には近づかないはずなので、彼より私達の方が先へと進みました。なぜなら摩周湖を避ける以上遠回りしなくてはならないからです」
「追い越したんだね」
「そうです。ダークさんは見当たりませんでしたがきっと近くにいるはずです。まずスワローさんを助け出す段取りを…」
「ラッキー。わいはついとるで！」
急に男の声が2人の耳に入った。素早く振り向くとそこには長い3本鍵爪を両腕からはやし、黒い服を着、ボサボサで荒い髪の毛を腰までのばした長髪の男が立っていた。その男の目は爬虫類のようにギラギラしており、口から長い舌が胸の辺りまでニョロリとのびている。
「誰！」
「ああ驚かしてすまんかったのぉ。わいはクロトカゲ。S級犯罪者クロトカゲや」
「！？」
エリカの反応が変わった。明らかに脅え始めている。
「エリカ？　どうしたの？」
「…S級犯罪者…πと同じ…『人の名を持たぬ者』…そんな2人もいたなんて…」
「天使様は知らんようやな？　まあ天界におったんやから当然や。そこの金髪のお嬢ちゃんはわいのこと知っとるみたいやね」
クロトカゲは嬉しそうに舌をゆらゆらと揺らした。
「天使様は生贄としてπにやるとして、そこのお嬢ちゃんはどうしようか？　そうや。見た目べっぴんやから女郎か娼婦館に売ったらええわ。元がええからしこめば売れそうやしな」
エリカが絶望的な顔をした。スワンはエリカが何を怯えているの

かわからない。
「あなた！　エリカに何をしようとしてるの！」
スワンはエリカの前に立つとクロトカゲに向かって叫んだ。
「おほほ。可愛いのぉ。あの天使どもとは大違いや。―でも無知は救いようがないんやで」
クロトカゲの3本の鍵爪がキラリと光る。
「―大人しくしいや。怪我はさしとうないんや。わかるやろ？　なにもせえへんかったら怪我せずにすむんや」
クロトカゲの爪が2人の少女に真っ直ぐ向けられた。

お城に向かって

私はどうしてここにいるのだろう？

ここはどこなのだろう？

白い空間の中、翼をもった人達が並んでいる。

誰もが何も言わず。何も答えず。無表情だ。

この光景を見た私は…そうだ…こう思ったんだ。

堕天使だ。

堕天使の葬列だなと。

＊＊＊

「う…ん」

「大丈夫か！？」

体が揺れている。振動が全身に伝わってくる。どうやら誰かにおぶられているらしい。

「すまない！　そういう事になっていたとは知らなかった！」

この声。バインさんだ。そうか。あの草むらから出てきたのはバインさんだったんだ。

顔を上げると前にはアナさんがコモリちゃんをおぶって走っている。どこに行くんだろう？

「バイン！　この先に城はあるんだナ！」

「おうよお姉さん！　待ってろよ！　すぐに助け出してやる！」
助ける？　誰を？　…ああそうだ。スワン達だ。早く助けなきゃ。
森を抜けて高い丘へと飛び出す。
遠くにはお城が見える。
お城の周りには城下町が見える。
だけどその町や城には人の気配がしない。
何もしゃべらない水溜りのように静まりかえっている。
城の上の空には美しい模様の魔法陣が輝いている。
あの模様はまだ未完成だ。
完成してしまったら何もかもおしまいなる。

早く―早く行かないと…。

えっ？
今のは誰の声？

また意識が遠くなる。
そうだ。
少し甘えさせてもらおう。
バインさん達がいてくれるんだ。
きっとスワン達を助けてくれる。
もう少しだけ眠らさせてもらおう。

―この現実から少しだけ…。

でも不思議だな？
私…バインさん達と話したっけ？

セガルは静かに目を閉じた―。

『堕天使の葬列（第一幕）：完』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7034d/

堕天使の葬列　第一幕

2010年10月8日15時49分発行